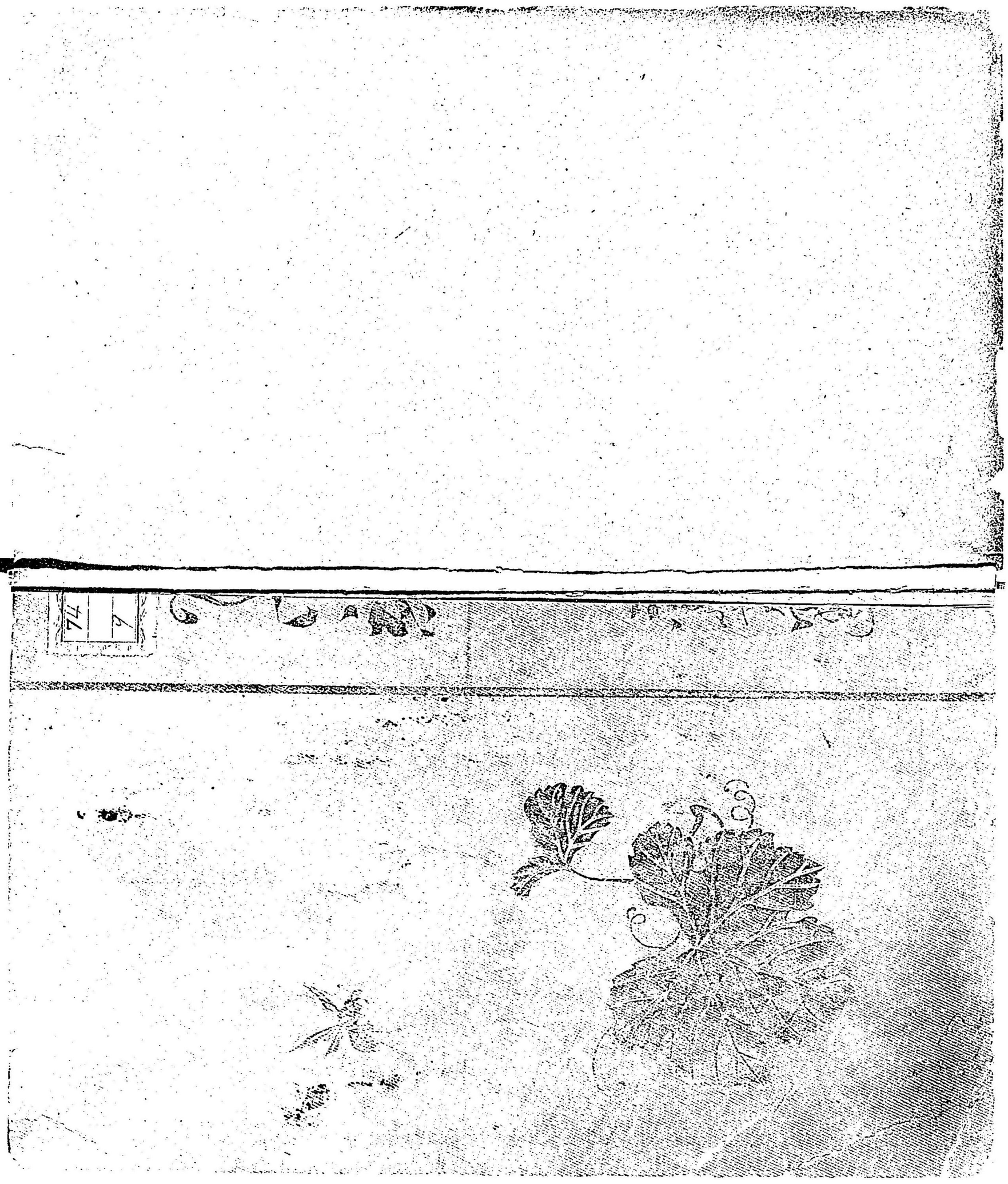

凡例

一　片戀も附錄の二篇も共にイー、エス、ツルゲーネフの作なれど附錄の二篇は舊稿に添削を加へたるもの片戀は新譯稿を起したるものの譯は直譯を旨としたれど意譯にしたる所もありまするも餘りに耳遠く聞ゆるあたりは故らに意譯を選べて引繕へる所も罕にはあり

明治廿九年秋

譯者識

明治文庫

片戀

二葉亭四迷譯

(一)

恰ど私の十五の時でした、と某といふ男が話し出した、ですから最う餘程以前の事です。私も漸く自由の利く身となつたので、そこで早速外國へ出掛けましたが、それも當時能く人の言つた教育完成のためではないので、唯何となく浮世の態が見たかつたので。其頃はまだ壯健でもあつたし、君くもあつたし、氣は浮いて面白いに、金も未だ亡くならず、それに若さ故で心配すべき事もなかつたので、前後の考もなく、仕度放題を仕散らして、早く云へば、先づ花の咲いたやうな境涯でした。一躰人といふものは草木と違ふから、永く花を持つことは出來ないものであるが、其頃は未だそんな事には頓と氣が附きませんでした。何ても若

い時には彩色をした餅を喰べて、これがその命を繋ぐ麵包である、などと思つてゐるものだが、軈て其時節が來れば麵包の片塊をも强求つて喰べるやうになります。けれども今此處でそんな事を言出しても仕樣がないか。

そこで、私は何の目的が有るでもなく、計畫もなく、唯心に適つた所なら、何處にでも逗留する、新しい面が見たくなれば、直ぐ出立するといふ調子で旅行をしました――新しい面を見たくなればといふのは實際の事で。私には人間の外は何も面白くなかつた。珍らしい紀念碑とか、有名な陳列所とかいふものは甚い嫌で、例のローンラカイ（傭男）などいふ者は、面を見たばかりでも、氣色に障つて悶々とする位であつたから、ドレスデンのグリーヲ、ゲウヒルベ（美術品陳列所）では狂人ぢみる程でした。尤も自然には隨分深く感じる方であつたが、自然の美とかいふ、山でも、岩でも、瀑布でも、何でも可いが、尋常たものでないもの

は、人に纏綿つて長閑にはさして當かぬやうな所があるので、それで好きませんでした。その代り人の面ですな、活きてゐる人の面――言葉にしろ、所作にしろ、笑聲にしろ同じ事だが――是は私に取つては無くて叶はぬもので。群聚に交つてゐれば、いつも氣が晴れて愉快になる。人の行く方へ行つたり、人の喚くのに連れて喚いたりするのも面白いが、人の喚くのを見てゐても面白い。人を觀察して樂しむ……と云つて强ち觀察するのでもなく、唯まじり〳〵見てゐるのであるが、それが又妙に面白くて、頓と飽くといふことを忘れて了ふ。ほい、また話が逸れた。

そこで二十年ばかり前に、ラインの左岸の某といふ小さな町に逗留してゐた事がありました。少し世間を離れてゐたからた、といふものは、その少し前に温泉場でさる若後家と知己になつて、其女に痛い目に逢されました。女といふのは、なか〳〵の美人で、才氣もあつて、誰とでも戲ける――私も其手玉に取られた一人でさ。初の内は大きに氣を持たせ

られたが、其後海軍大尉だとかいふ、頬の赤いペッリャの男に見代へられて、思ふさま熱湯を飲ませられた。實は湯傷と云つても、さしたる事もなかつたが、何だか少しの間は悲しい面をして、世間を遁かつてゐなければならぬやうな氣がして――若い時は何を爲たつて氣が休まりまさあ！――それでその某といふ小さな町に宿を取つてゐました。

此町は小高い丘の二つ並んだ裾に在つて、壁も塔も古びて、百年も經つた菩醍樹もあれば、ラインへ注ぐ清いな小河に急な橋も架つてゐて、風景の佳い處であつたから、氣に入りました――殊に葡萄酒の佳いのが氣に入りました。日が暮れると（六月の事であつたから）、髪の毛に白ばい光澤を持つた獨逸の婦人が狹い町を漫歩きして、外國人に逢へば艶いた聲で Guten Abend（今晩は）などゝ云ふ。月が古い家の尖つた屋根を出て、路上の小砂利が寂寞とした光の中に劃然際取つて見えるころまで、尚ほちらほら人影がする。その時分町を散歩すると、快い心地ですわい、

澄渡つた空からは月が餘念なく町を眺めてゐると、町はまた其を承知してゐながら、森とした中にも何處か人を誘ふやうな處もある月の光を浴て、鳴を靜めて控へてゐる。高いゴチック風の鐘樓の屋の棟では、金雞が蒼味の有る金色を放つてゐれば、薄光りのする河面にも、同じ色の光線が横に流れてゐる。板石葺の家の小窓には（獨逸人は皆險約だから）、細い蠟燭が心細く點つてゐる。葡萄の蔓が石垣越に曲つた頭を密と出してゐる。菱形の廣場の古井戸の邊で、何か物蔭を駈通ると、夜番の睡さうな口笛の音もすれば、氣の善い犬も低く唸る。風は面を撫るやうに吹く。菩醍樹の佳い香が紛々と鼻を撲つて、息氣までが自ら深くなる。そこでグレートヘン（獨逸人）といふ語が――我知らず口へ出さうになる。

ラインまでは此町から半里もありましたらう。能く出掛けて往つては、河の壯大な景色を眺めたり、少しは無理にする氣味も有つて、例の人惡

な後家さまの事を思つたりなどしながら、大きな一本立の桑皮の根方に据てあつた石の床几に腰を掛けて、時の移るのを忘れてゐた事も有りましたが、その桑皮の枝の間からは、悲しさうな小見めいた面相のマドンナの像が覗いてゐて、對岸には某といふ町が見えます。是は私の逗留してゐた町よりは少し大きな町で。或る夕暮に、私は例の氣に入りの床几に腰を掛けて空を眺めたり、河面を眺めたり、又は葡萄圃を眺めたりしてゐました。鼻の先では、河岸へ引揚げて、松脂を塗た腹を空にして伏せてあつた小舟へ、頭髪の白つぽい小兒が這上つて遊んでゐます。河面には小形の舟が帆に緩く風を孕むで靜に駛つて行くので、青々とした水面に綫ばかり白波が起つて、淙々といふ音が微にする。ふと音樂の調が聞こえたから、耳を澄まして聽いてみると、某町でクリス（英語にないフルッ）を奏つてゐるので。コントラバース（樂器の名）の籠つた音が斷續して聞こえれば、ヴァイオリンの音も幽にして、盛に笛を吹いてゐる。

「何だらう、あれは？」と傍へ來た、クリース（毛織物の名）の胴服を着て、青色の靴足袋に扣金附の半靴を穿いた老人に訊ねると、その老人は先づパイプを左から右へ啣直して、

「ありや何で御座りますよ。大學の書生さん達が某處からコンメルシを爲に來たので。」

「見に行かう。恰どまだ其町へは往つた事がないから、」とから思つて、私は渡守を尋ねて、對岸へ渡して貰ひました。

（二）

コンメルシといふものは如何なものだか、未だ御存じない方も有るでせうが、これは一種の祝宴で、おなじ土地の學生が寄集まつて學生組合（Landsmannschaft）といふものを組織してゐる、その集會です。このコンメルシに參會する者は大抵昔から獨逸の學生風に定つてゐる服裝をして

居るもので、ウェンゲルカ上衣の名を着て、大長靴を穿いて、何か定つた色の抹額を附けた小形の帽子を冠つてゐます。通例セニョールと云つて組合長がある、それを幹事にして晩餐を喫べに集つて、酒を飲やら、Landes-vater, Gaudeamus などゝいふ歌を唱ふやら、烟草を吹かすやら、悪口を吐合ふやらして、徹夜騒ぐ。時としては樂師などを聘することも有ります。

恰度斯ういふコンメルシが、某町の太陽の招牌を掲けたホテルの、往來へ向いた庭で催されたので。見れば、ホテルの屋根にも庭先にも、旌旗を風に吹靡かして、學生達は刈込をした菩提樹の蔭に食卓を並べて坐つてゐる光景で、一ッの食卓の下には大な猛犬までが臥てゐます。其處を少し離れて長春藤の亭が在て、其内では樂師が熱心になつて、樂を奏してゐたが、をり〳〵麥酒を仰つては勢を添けなどしてゐます。庭の四圍は低い垣で、其外には見物が黒山のやうに環視てゐます。他所者は珍らしいので、何でも一ッ視て放樂をあやうといふ了簡なのでせう。私も矢

張見物の中に交つてゐました。學生の面を視てゐると、何となく面白くなります。抱合つたり、喚いたり、邪氣なく騒けたり、眼の内を爛々に光らしたり、謂なく笑つたり——世の中に此程心地の快い笑方は有るまいが——笑つたりなどする、若い鮮いた心が面白さうに騒立つ、何處へでも可い、唯前へ進みさへすれば可いといふ意氣込の破裂する、罪の無い遊を視てゐると、何時か此方の心もそれに動かされて、如何やら浮々し出して、此連中に加はらうかとまで思ひました。

すると背後の方で、

「アーシャ、最う行かうか？」

と露西亞語で物を言つた者がある、男の聲で。

「最う少時。」

と女の聲で答へる、是も矢張露西亞語で。

ついと振向いてみると…寛濶したクールトカ上衣の名を着て、フラーシカ

の帽子を冠つた若い紳士が眼に入つた。中脊の令嬢が其紳士の腕に凭れてゐたが、面は麥藁帽子に隠れて、半分は見えなかつた。

「貴君は露西亞の方ですか？」

と我知らず口を滑らすと、紳士は微笑を漏らして、

「然うです。」

「これは意外な！……こんな田舍で……」

「私共も實に意外です。が、宜しいぢや御座いませんか？幸です。お知己になりませう。私はガキンと申す者で。これは私の……と少し言淀むで、妹です。御姓名は？」

私も名告をして、それから種々談話をしましたが、此紳士も私同樣氣散じの旅行次でに、一週間ばかり前に此町へ來て、此處に足を留めたのださうで。實は私は外國で露西亞の者と相識になるのを餘り好みませぬ。露西亞の者か然うでないかは、遠方から望ても、歩行つきや衣服の裁方

で判るが、殊に面色で判る。平生は得々として人を嘲けるは愚か、動もすれば勿躰ぶらうとする程の面色が、俄に悸々した心配さうな面色となつて……人間が急に注意の塊となる、眼をきよと〳〵させる……「失敗つた！　馬鹿な事を言つたのでないか、人が嗤つてゐるのではないか？」とそのきよろつく眼が言ひさうである……かと思へば、少し經てば、また舊に復つて勿躰ぶる、尤もをり〳〵は鈍な怪訝な面色をすることもあるが。兎に角私は露西亞の者とさへ云へば避けるやうにさてゐたが、このガキンばかりは頭から氣に入りました。世には隨分得な面相の人もあるもので、誰にしろ其人の面を見ると快い心地になる。何となく温まるやうな、撫すられるやうな心地になる。ガキンも恰ど然うした面相の男で、頗然で、愛くるしい、それに大きいが、柔しい眼で、軟かな縮毛で、物の言振にも愛敬を持つてゐるので、顏は見ぬでも、聲を聞いたばかりで、微笑してゐるのが知れる程である。

ガギンの妹といふのも、一目見るからなか〳〵美しいと思ひました。淺黑で、圓顏で、小さな徹つた鼻で、殆ど小兒の如うな頬をした、黑眼勝な淸しい眼付の娘であつたが、其面相には何處か特色が有つて、姿も美しかつたが、未だ何となく發育し了らないやうにも見えました。兄には少しも似てゐません。

ガギンは私に向つて、

「私共へお出でなさらんか？　最う見てゐてもつまりますまい。これが國の者なら、玻璃を壞したり、椅子を破したりするのでせうが、此人達はえらい溫順しい。如何だい、アーシヤ、もう歸らうか？」

妹は頷いて同意しました。

ガギンは尙ほ言葉を繼いで、

「宿は町盡頭です。葡萄圃の中の一軒家ですが、高臺で、隨分景色は佳しい方で。まアお出でなすつて御覽なさい。主婦さんが酸乳を用意して置く筈です。もう程なく暮るでせうから、月が出てから、渡をお渡りになつた方が可いでせう。」

そこで連立つて出掛けました。町の低い門を潛つて（此町は小石を塗込めた古い壁で、四方を取圍むであつたが、砲孔などは昔の儘で、未だ頽れずにある處もありました。）低い門を潛つて、それから田圃へ出て、石垣に沿うて約そ百歩ばかりして、狹い角門の前で停歩りました。ガギンは其角門を開けて、先へ立つて案內をしながら、急な徑を高臺へ上つて行きます。左右の突出た處には葡萄が植えてあつたが、今しがた入つた日の赤々として覺束ない光が、靑い莖にも、細長い添木にも、圓平な石が大小入雜つて一面に散亂つた、乾燥いた地面にも、今上つて行く高臺の、黑々と見える橫木を斜に渡して、明るい窓を四所に開けた、小さな家の白壁にも映つてゐます。

その小さな家の傍まで來るとガギンが「これが宿です。それ其處へ乳

を持つて行くのが主婦さんで。Guten Abend, Madame、今晩は。直ぐ喫ることにしませう。が、まァ御覽なさい：佳い景色でせう。」

成程絶景であつた。眼下には兩岸の翠色滴るばかりの中を、ラインが銀を延べたやうに流れてゐて、一所入日を受けて、赤味がゝつた金色を放つてゐる所がある。町は潜むだやうに岸に引添いて、家も往來も手に取るやうに見えて、そこらに丘やら野やらが渺茫と見渡される。瞰下しても佳かつたが、向上れば尙ほ快つた。その中にも空の底深く澄むだところ、空氣の明るく瑩徹るところは、眼も覺めるばかりで。そのまた空氣が涼しい上に輕くて、微に搖れては、そよ〳〵と吹渡るところは、宛で塲處が高いから、伸々すると云つたやうな鹽梅である。

「結構なお宿ですな！」

「妹が見附けたのです、」と云つてガギンは妹を顧みて、「ねえ、アーシャ、お前に一ッ世話を燒いて貰はう。皆此處へ運ばせてお呉れ。外で喫らう。

彼所の方が音樂も善く聞こえさうだ。」更に私に向つて、「何ですな、ワリスといふ奴は傍で聽いては仕樣のないものですな――厭な、粗い音がするばかりで。けれども遠方で聽いてゐると妙ですて、何だか斯う胸にロマンチックな線でもあつて、それに觸られるやうな鹽梅で。

アーシャ（アンナといふのが本名ではあるが、ガギンはアーシャとばかり云ひますから、私にも然う云はせて戴かう）アーシャは家内へ入つたが、纏て主婦さんと二人して、廣蓋に乳入、皿、匙、砂糖、菓物、麵包などを載せたのを持つて出て來ました。そこで銘々座に着いて晩餐を始めました。その時アーシャが帽子を脫つたのを見ると、黑々とした頭髮であつたが、斷方も撫付樣もまだ小娘風で、環毛にしてふつさりと耳や領へ垂らしてゐました。初めの内は何となく含羞むでゐたので、兄が「アーシャ、そんなに小さくなつて居らんでも可よ。お客樣は喰付はなさらんよ。」といふと、自分も微笑したが、それから少時經つと、もう自

分から進むで私と談話を爲ました。私は此娘ほどちよこまかするものを見たことはありません。一分時と動かずには居ません。幾度となく起上つて、家内へ駈込むかとすれば、また駈出して來て、何か中音に唱つて、安らに高笑をする。それも極く變な風で、耳に聞いた事を笑ふのではなく、心に浮ぶ種々の事を笑ふやうで。大きな眼で、憚る所なく正しく物を視るのが常であつたが、時としては眼を少し細めることもある、其時は眼差が急に柔しく奥床しくなる。

二時間ばかり閑話を爲てゐました。日は最う疾くに暮れて、四邊が初は眩いほど煌々してゐたが、其中にあか〳〵と明るくなつて、遂に碁さめて、薄闇くなつて、見る〳〵夜に移り行けれど、談話は四邊の空氣の如うに、穏な蕭然した調子で、なか〳〵斷えません。ラインワインを一壜取寄せて、それをガキッと二人して悠々と飲合ひました。まだ音樂が聞こえてゐたが、其音色は前よりは微妙に聞こえました。火影が町にも

河面にも點々と見えます。アーシャは捲髪の眼に振懸るほど急に首垂れて、默つて了つて、纏て太息を吐いて、睡くなつたと云つて、家内へ入いつたが、其癖其久らくの間、燭火をも點けずに、鎖切つた窓の彼方に立在むでゐるのが見えました。兎角する内に月が出て其影がラインに流れると、四邊は明るくなつた處もあれば、またもや〳〵とした處もあつて、宛然別世界のやうになる。二人が飲むでゐた多角形のコップの中の葡萄酒までが幽妙の光を放つて來る。風は禽ならば翼を戢めたやうに靜まつて、そよとも音を立てない。地は生煖かな夜氣をぱか〳〵と吐く。

「最うお暇を爲ませう。踟躕してゐると、船頭が見附からんかも知れんから。」

「ですか。」

かキンと連立つて徑を下りて行くと、ふと後の方から小砂利を蹴散らして駈けて來る者がある。見ればアーシャで。

「お前まだ寢ないのか？」と兄が云つたが、それには返答をもせず、二人の側を摺抜けて駈けて行く。ホテルの庭では學生達が點した名殘の燈明が、消々になつて植木の葉裏を照らすので、木の葉は祭日の作物か何かのやうに見える。河岸でアーシャに出會つたが、アーシャは何か船頭と談話を爲てゐました。小舟へ飛乘つて、此新知の人々に告別すると、ガギンは翌日遊びに來やうといふ。私は其手を握つて、更にアーシャの方へ手を出してみたが、アーシャは唯私の面を玄ろりと視たばかりで、頭振を振つて居ます。舟は岸を離れると其儘さつと流される。元氣な老船頭は重さうに櫂を薄闇い水中へ投ずる。

「そら月の中へお入ンなすつた。そらお出なすつた」とアーシャが聲を掛ける。

水面を覗いてみると、薄黑い涙が舟を取捲いて騷いでゐるばかりです。

「さやうなら」とまたアーシャの聲が響く。

「明日また」とガギンの聲もしました。

舟が着いたから、岸へ上つて振向いて見たが、最う對岸には誰もゐない。また月影が河面に横はつて燦々と見え出す。古風なランネルのワルスの調が跡を追つて河越に響いて來る。成程ガギンの云つた通りで、それを聞くと何となく物の懷かしくなつて、調子に連れて胸の線も鳴り出す。何處ともなく良い香のする空氣を靜に吸ひながら、薄暗い野を通つて宿へ歸つて來ましたが、室へ入つた時は何と云つて目的もなく捉まへ所もないが、何か心待に待つてゐることがあるやうで、もだくだとして心地よく蕩けてゐました。洵に幸福であるやうな心持がしました……何が幸福だと云へば、何を希望してゐたのでもなく、何を思つてゐたのでもない……けれども唯何となく幸福であつたので。

快く搖ぐられるやうな氣がして耐らなかつたので、笑出さぬばかりになつて、臥床へ潛込むで、其儘眼を瞑むらうとして、ふと憶出せば、今

宵一夜かの難面い寡婦さまの事を忘れてゐた…「これは志たり！　惚れてゐるんぢやないか？」と我と我心を異むでみたが、此不審は立てばなしにして置て、搖藍に入れられた赤兒のやうになつて、私はどうも眠入つたらしかつた。

（三）

翌朝最う眼が覺めては居たが、未だ床に居ると、窓下でどと〳〵と杖を突鳴らして、こんな歌を唱ふ者が有る。

おん身は寐てか？
よしさらば、
おどろかさなむ
いとの音に……

ガキンの聲といふのは直ぐ知れたから、手捷く戸を開けると、

「お早うございます、」と云つて果してガキンが入つて來て、「早朝からお邪魔をします。が、まア御覽なさい、實に心地が快くなるから。涼しくて、露が深くて、雲雀が鳴いてゐる……」

艶やかな縮髪で、のんびりした頷元をして、頬を薔薇色にしてゐる所を見れば、當人の鮮かなことも、朝景色に讓らぬ程である。

衣服を更めてから、二人して庭へ出て、床几に掛つて、咖啡を取寄せて、それから談話を始めました。其時ガキンの目的といふのを聞きましたが、此人は相應の財産もあり、何を爲やうと氣儘の身の上であるから、畫を學ばうと思つてゐるのださうで。けれども思立ちやうが遲くて、多くの歳月を空に過したと云つて、それを深く悔ひてゐました。私も同じく自分の志を語つて、事の序に例の不首尾な戀の始末をも打開けて話して了ひました。ガキンはそれに調子を合はさんではなかつたが、大に同情して呉れたとも見えません。愛想に二度ばかり太息を附合つて、さて

宿へ來て自分の畫稿を覽て呉れぬかと云ふから、早速承知しました。

ガキンの宿へ往つて見ると、アーシャは留守です。主婦さんの話では「お城趾へ」往つたのだと云ふ。某町から半里ばかりの處に封建時代の城趾が在つたので。ガキンは有るだけの畫稿を盡く出して見せました。此人の畫稿にはなか〳〵生氣もあれば、眞に逼る所もあつて、筆の運びも何となく自在であつたが、一ッとして畫上げたものはなく、而も其畫風には何處やら取締のない、心元ない所もあるやうに思はれたから、思ふ所を明白に云ふと、ガキンも歎息して、

「然うです、仰しやる如りです。どれも皆拙い、稚いものだ。けれども如何も仕方がないですよ。確乎習つたことがないのに、それにスラウヤン人種の特性だといふが、例の放縱の氣に克てない。仕事を想像してゐる内は、鷲の翔るやうな勢ひでもつて、大地をも動がしかねぬ意氣込で――けれども、卒仕事に着手となると、直ぐ根氣が盡きて閉口して了ふ。

勵まさうとしてみたが、ガキンは手眞似で以て、到底も駄目だといふ意を見せて、而して畫稿を掻集めて、長椅子の上へ放下して、口の中で、

「若し十分に忍耐力が有つたら、私のやうな者でも、如何にかなるでせう。けれども忍耐が足らぬければ、何年經つても、到底も物にはなりますまいて。それよりかアーシャでも探して來ませう。」

二人連立つて出掛けました。

(四)

城趾へは樹木の生茂つた狹い谷間の、曲折つた道を通つて行くのであるが、谷底には小さな河が流れてゐる。その河水が岩石を躍越え〳〵、凄まじい音を立てゝ流れて行くところは、連山の截斷つたやうに急に斷えた彼方に、汪洋として光つてゐる大河へ流注まうと云つて、焦心てゐ

るやうに見える。ガギンは面白く日の當つた所を二三箇所指して見せたが、成程其説明には畫家でないまでも、確に美術家らしい所は有りました。程なく城趾が見える。裸岩の上に四角な塔が儼然と聳えてゐる。一面に黒むで、割れたやうに横に裂目が入つてはゐたが、未だなか〳〵堅固なものである。苔蒸した壁が其裾を隠して、所々に葛が這纏つて、曲むだ材木が古びた砲臺からも、頽れた圓蓋からも落懸つてゐる。城門は今だに昔の俤を留めてゐたが、其處へは石の徑が通いてゐる。私共が其門際まで來た時、行先に女の姿が髣髴と見えたかと思ふと、其女は何やら壞物の堆積つた上を、疾風の如く駈通つて、城壁の彳出た所へ登つて了つた、そのつい下は千仞の谷底である。

それを見てガギンが「アーシャだ。宛然狂人だ。」

門を入ると、其處は狹い空地で、野生の林檎の樹や蕁麻などが生茂つて半分を塞いでゐる。壁の彳出た所には果してアーシャが蹲踞つてゐます。此方を振向いて笑出したが、其處を離れやうとも爲ません。兄は手真似で恐喝して見せたばかりで有つたが、私は大聲にその亂暴を咎めると、

「打捨てお措きなさい、」と兄が小聲で止める、「逆らつては不可。貴君は未だ御存じないんだが、彼女はまだ〳〵塔へも登りかねません。それよりか先ア一寸あれを御覽、此地の人もなか〳〵如才が無いて。」

言はれて振返つて見ると、片隅に小さな板屋が在つて、其内で老婆が靴足袋を編みながら、眼鏡越に吾々を見てゐます。これは旅人を相手に麥酒、生姜餅、ゼリツェル水などを鬻いでゐる老婆で。私共は其所の店頭に休むで、錫の重い水呑で可なり冷たい麥酒を飲むでゐました。アーシャは頭をモスリンの頸卷で包むで、足を一所に寄せて、身動をもせずに、尙ほ蹲踞つてゐます。美しい横顔が晴れた空に劃然際取つて見える、けれども私はそれを見ると、何となく不快を感じた、尤も昨日から此娘の

挙動には何處ともなく無理な自然らしくない處のあるのに心附いてはゐましたが……其時も心中で「我儕を驚かさうと思つてゐるのだな。馬鹿な真似をする女だ。お轉婆も斯うなると、小兒じみてゐる」と嘲つてゐると、アーシャも然うと悟つたやうに、ふつと振返つて、私の面を凝然と諦視て、又高笑をした。それから二飛ばかりに壁を飛下りて、老婆の側へ來て、水を一杯と無心しました。

兄を顧みて、「私が飲むんだと思つて？　然うぢやないの。彼壁の上に花が咲いてゐるから、水を遣らないと不可と思つて。」

けれどもガキンは何とも返答をしなかつた。アーシャは片手に水呑を持つて、壁へ攀上りはじめ、をり〳〵停歩つて屈むでは、可異い程の真顔をして、水を幾滴か覆して日に燦めかせる、其所作が可愛らしくないでは無つたが、私は尙ほ笑止らしく思つた。尤も其身輕なことに感ぜずには居られなかつたが。と或る危ない處へ來て、アーシャは故意とらしく聲を立てゝ、さて高く笑つた……愈〳〵以て笑止らしくなつた。

「宛然山羊の這上るやうだ、」と獨語のやうに云つて老婆も、暫らく靴足袋を膝の上に措きました。

兎角する内にアーシャは水呑の水を傾盡して、體を搖てゐやなら〳〵と戻つて來たが、怪しく微笑して眉や鼻や唇を歪めて、浮々してゐる中にも、何處か傍若無人な樣子も有つて、眼を細くしてゐる。

「貴君は見ともない事をすると思つて居らつしやるでせうが、私は關はないわ、何でも貴君は私の風を見て樂しむで居らつしやるに違ひないから、」と其顏が云ひさうに思はれる。

「アーシャは身輕だ、なか〳〵身輕だ、」とガキンが云つた。

するとアーシャはふと何か羞入つたやうで、長い睫毛を垂れて、悪い事でも爲たやうに、小さくなつて私共の側に坐つた。其時始てアーシャの面を熟く視ることが出來たが、世に是程變り易い面は恐らく又とある

まい。一瞬の間に最う蒼ざめて了つて、何か物思はしさうな、殆ど悲しさうな面色となつたのみならず、思做でもあらうが、其面相も大きく嚴めしくなつて、艶も素氣も亡くなつて了つた。全然温順しくなつて了つた。それから連立つて城趾を視廻つて（勿論アーシヤも跡に隨いて來たが）、景色を眺めなどしてゐる中に、飯時近くなる。茶店へ戻つて勘定を爲ると云つて、ガキンが復麥酒を一杯持て來させて、可異な眼付をして私の面を視ながら、

「貴君の戀人の健康を祝して。」

するとアーシヤが突然、

「此方には――貴君にはそんな方がお在なさるの？」

「誰にだつて在るさ、」とガキンが答へた。

アーシヤは少時沈吟してゐたが、其内にまた面色が變つて、また嘲けるやうな傍若無人な冷笑が顯れて來た。

歸路には愈〻高笑をして益〻戲ける。長い樹枝をへし折て、それを小銃のやうに擔いで、頸卷を頭に卷付けなどする。忘れもせんが、其時途で頭髮の光澤の白ぱい、氣取つた英國人の一群に出逢つたが、其連中は言合せたやうに、吃驚した素氣のない面をして、眼鏡を加てゝアーシヤを目送るので、アーシヤは故意と大聲に歌を唱ひ出すといふ始末で。宿に歸るや否や、自分の室へ入つて了つたが、晝飯の時になつて漸く出て來たのを見ると、晴衣の中でも一番美のを着て來たらしく、頭髮も叮嚀に撫付けて、手袋まで穿めてゐる。卓に就いても、大層取澄して、殆ど氣取つてゐるのかと思はれる程で、食物には一寸口を着けたばかりで、只杯で水ばかり飲むでゐる。今までとは全で違つた、品の善い、氣高い令嬢になつて私に見せやうといふ氣であつたのでせう。それでもガキンは些も干渉ひません。何な事でも大目に見て置くのが習慣になつてゐたものと見えます。けれども唯時々氣の善い面をして私の面を視ては肩を

盛める、「まだ小兒です。大目に見て遣つて下さい、」といはぬばかりで。

さて飯が終む。アーシヤは起上つて一寸會釋をして、帽子を冠りながら、兄に對つて、フラウ、ルイゼの家へ遊びに行つても可かと聞く。ガギンは、相變らずとは云ふものゝ、此時ばかりは少し狼狽した氣味も有つて、微笑しながら、

「請許て行くとは珍らしいな　何故？　退屈かい？」

「いゝえ、然うぢや無いんですけれど、昨日最う約束をして了つたもんですから。それにお二人ぎりの方が可でせうと思つて、此方が（と私を指して）まだ何かお話しなさる事もあるでせうから。」

アーシヤは出て行つて了ひました。

後でガギンが私の眼を避けながら、

「フラウ、ルイゼといふのは畜と此町の町長をしてゐた者の妻だつたさうですが、今は寡婦で、人が好いばかりで凡庸ん老婆です。所が是がま

た非常にアーシヤを愛敬する。アーシヤも兎角下等の人間と相識になりたがる。こんな癖も畢竟傲慢から起るのでせうな。」

しばらく沈默してゐて、「後女は、御覽の通り、隨分甘やかしてあるが、然し如何も仕樣が無いのですよ。私は如何な者に向つても壓制などすることは出來ない性質だが、彼女に向つては尙更出來ません、尤も餘り酷にも出來ない事情もあるですが……」

私が默つてゐたので、ガギンも談話を變へて了ひました。私は深く此男を知れば知る程、どうも親しみが增して來る。此男の人と爲りは造作もなく解つたが、是は純粹の露西亞人で、正直な、質樸な男であるが、唯惜い事には、少し優長で、氣力が薄くて、情熱が足りない。若いからと云つて、意氣が壯であるでもなく、唯温雅としてゐるばかりである。極て愛嬌が有つて才氣も有るが、是が成熟したら、如何な者になるであらう。美術家になる……と自分では云つてゐるが、身を賣めて倦まずに

勉めなければ、美術家にはなれぬものである。けれども勉めるといふことは如何であらうかと思つて、密にガキンの擧動を窺へば、面相も優しく、言語も優雅である。いや、此男には勉められない、奮發せられないと斷念ました。けれども之を愛せずには居られません、魂が如何も引寄せられるやうである。殆ど四時間ばかりといふもの、膝を交へて長椅子に掛つてゐたり、悠々と住宅の前を散歩したりして、談話をしてゐましたが、此四時間ばかりの間に、二人の意氣は全く投合して了ひました。

日は疾くに暮れて、既う歸る時刻と爲つたが、アーシャはまだ歸つて來ません。

「氣隨な奴だなァ！　まだ歸つて來ない。なんなら貴君を送つて行きませうか？　然うすると序にフラウ、ルイゼの家へ寄つて、彼處に居るか、如何だか、聞いてみます。大した迂路でもないから、」とガキンは云ふ。

そこで連立つて町へ出て、狹い曲折つた横町へ入つて、窓を二ッ並べて取つた、四階建の家の前で停歩つた。此家は上へ行けば行く程、餘計往來へ出張つた家で、古い彫物の飾が有つて、下階には太い柱が二本立つてゐる。家根は瓦葺で尖つてゐて、四階目には嘴のやうな絞車が突出てゐて、宛然大きな鳥が屈身だやうな家である。

「アーシャ！　此家か？」

とガキンが大聲に云ふと、三階の燈火の射した窓がごとりと云つて、ぱつと開いて、アーシャの面を出したのが薄々見えたが、其背後には齒の脫けた、眼のまよぼ〳〵した老婆の面も見えた。

アーシャは姿致を作ながら、窓に肱を持せて、

「居ますよ。私は此家が大好！　阿兄、之を呈げませう、」と云つて風呂草を兄に投げて、

「私は阿兄の戀人の積よ。」

フラウ、ルイゼは笑ひ出した。

「某さんがお歸なさるよ。お前に挨拶を爲ると云つて、此處までお出なすつた。」

「眞實？　そんなら其を某さんに呈げて頂戴、私は直ぐ歸りますよ。」

と云つて窓を閉めたが、それから如何もフラウ、ルイゼに接吻したらしかつた。ガギンは默つて私に風呂草を贈すから、私も默つてそれを受取つて、懷袋へ入れて、さて渡場へ來て川越をしました。

忘れもしない、それから私は何を思つてゐたでも無いが、何かぼ〳〵として宿へ歸つて來ると、不圖獨逸では珍らしいが、平生親慣れた香がしたので、停歩つて四方を見廻すと、路傍に小さな麻圃が在つた。其淋しい香を嗅ぐと、ふと故郷の事が憶出されて、頻に懷かしくなる、急に露西亞の空氣を吸つて、露西亞の土を蹈みたくなる。「一躰此地で何を爲てゐるのだ？　何も知らぬ他國へ來て、知らぬ人の中に交つてゐる必要は無いではないか？」と口へ出して我と我を詰ると、今まで鬱々として氣

を腐らしてゐたものが、急に口惜しくなつて、ぢり〳〵と氣が焦燥つて來る。宿へ歸つたときには、全たく昨日の心持はなく、憤々として多時は落着くことが出來なかつた。自分にも何が殘念だか判らぬが、兎に角殘念で〳〵耐らぬ。良久らくしてから、座に着いて、ふと夫の人惡な寡婦さまの事を憶ひ出して（尤も毎日寢る時分には此女の事を憶ひ出すのが恒例となつてゐたのではあるが）憶出して、其手紙を一通取出す。さて取出しは取出したが、まだ啓けて見ぬ内に、ふとまた氣が變つて……アーシャの事を憶出す。ガギンが何やら露西亞へ歸り難い事情が有るやうに云つたが、それを憶出すと……「妹だか、何だか!?」とつい大きな聲が出た。

衣服を着更へて、臥床へ入つて、眠らうとしてみたが、眠られない。一時間も經つてから、床の上に起き直つて、枕に肱を持せながら、また「作つたやうな笑方をする我儘娘」の事を思つて、口の中で、「宛然ラファ

エーリの畫いたアアルチシンのガラテヤの小さいのだ。それも然うだが、必然妹ぢやない……」

寡婦さまの手紙は床に落ちた儘で、月影に白く見えるばかりで、何時取上られるともなかつた。

(五)

翌朝また某町へ往きました。自分ではガギンに會たくなつた積でゐたが、内々はアーシヤが如何するであらうか、また昨日のやうに變な風をして見せるであらうか、それが見に往きたくなつたので。二人共客間に居たが、可異なこともあれば有るもので――昨夜も今朝も、露西亞の事ばかり懷續けてゐた故かして、アーシヤは全くの露西亞の娘、而も尋常の娘で、殆んど小間使か何かのやうに見える。故ぼけた衣服を着て、髪を耳の間へ撫込むで、端然として窓に對つて、刺繍を爲てゐたが、其風

采の肅然と温順なことは、宛で今まで之より外に何も爲た事は無いと云つたやうな風で、殆ど物を云はずに、沈着いて仕事を諦視て、雜有味も素氣もない面色をしてゐるので、露西亞仕込のカーチヤ、マーシヤ云、みいちやんなりを憶ひ出すともなく憶ひ出すと、驚て中音で「母さん、母さん」を謠ひ出したから、彌々それに違ないことになつた。私は其黄ばむだ、艶の抜けた、小さな面を見てゐると、不圖昨日の妄想を憶出して、何やら遺憾いやうな氣がしました。天氣は極く上天氣であつたので、ガギンが寫生をしに行くと云ふから、私も同行しても可かと聞くと、「可いどころぢや無い。貴君の事なら、何ぞ善い忠告をして貰へるかも知れん。」

ガギンは圓形のVan Dyck風の帽子を冠つて、ブルーザ(上衣の名)を着て、紙挿を小脇に抱へて、出掛けるから、私も其跟に隨いて行きました。宿を出る時、ガギンが妹を顧みて、肉羹を餘り薄くないやうに調理へさせて

置いて呉れろと云つたので、アーシャも自身に廚房へ出て、氣を注けやうと云つてゐました。此前も遊びに來たことのある例の谷まで來て、かギンは石に腰を掛けて、枝を一杯に擴げた、虛だらけの、樫の古木の寫生に著手たから、私は草の上に横臥んで、書物を取出しは取出したが、二行とは讀續けず、かギンも頻に紙を汚すのみで、二人とも唯饒舌てばかり居ます。如何いふ風に働かねばならぬとか、如何いふ事を避けて、如何いふ事を心懸けなければならぬとか、又は今の美術家は本來時勢と如何いふ關係を持つてゐるとかいふことを論ずるだけは隨分巧に、微細な點まで論じたが、結局かギンは今日は氣が乘らぬと謂めて了つて、私と並んで横臥ぶ。さアそれからは最う誰に遠慮もなく、互に滔々と雄辯を揮つて、或は熱心になつたり、或は沈吟したり、又は感極つて泣かむとしたりしたが、談話は大方は意味の判然せぬ事で、尤も露西亞人といふ者はかうした談話が甚だ好であるが。散々饒舌て、欣然と自適して、

何か一廉の事を仕遂げたやうな心地になつて、宿に歸つて見ると、アーシャは毫も出た時と變らない。何程意を留めて見ても、露ほども厭味氣もなければ、少しも故意と風姿を作る氣色もなくて、今日ばかりは不自然と云つて咎めたくも、咎めやうがなかつた。

「はゝァ！　懺悔をして精進潔齋といふ態だな、」とかギンも云つた位です。

晩になると、アーシャは幾回となく心から欠びをして、早くから寢に往つたので、私も程なく辭して宿に歸つて、最う何をも妄想しなかつた。此日だけは一日眞面目で消しました。尤も、憶出せば、これから寢やうとする時、「宛然七面鳥のやうな娘だ、」と我知らず口へ出して云つて、少し考へて、「けれども如何しても妹ぢやない。」

(十八)

全二週間經ちました。私は毎日のやうにガヂンの宿へ遊びに往きます。アーシャは何か私を避けるやうにします。相識になつた最初の二日は、彼程はしやいで大に人を驚かしたものが、此頃は其樣な動止は少しもない所か、何となく氣の浮かぬやうな、當惑したやうな、妙な面色をして、前よりは笑ふことも少くなつたので、私も不審に思つて、密に其動止に氣を注けてゐました。

アーシャは佛蘭西語でも獨乙語でも隨分巧に談話をしたが、如何も婦人の手に成育た者らしくない。妙な、異常た、兄とは全く違ふ敎育を受けたとは何かに就けて知れます。兄は Van Dyck 風の帽を冠つて、ブルーザを着てゐても、如何にも温和で、幾らか柔弱な處もあつて、何處までも大露西亞の士族らしかつたが、妹はどうも令孃らしくない。總て所爲

に何處か沈着が無くて、樹で云へば此頃接木をしたばかり、酒で云へば未だ醱酵中といふ氣味がある。天性小心で物羞をするのが癖であるので、自分でもその內氣なことを口惜く思つて、强て磊落に大膽にならうとはするものゝ、然うばかりも行きません。私は幾回となく此娘の未だ露西亞に居た頃の昔咄を爲かけて、種々誘をかけて見たが、浮とは口を解きません。唯外國へ出る前は久らく地方に居たといふ事だけは話しました。

或日アーシャ一人きりで書見をしてゐる所へ往合せましたが、兩手で頭を支へて、指を深く髮毛に埋めて、一心に讀むでゐます。

側へ往つて、

「これは感心な！　大層御勉强ですな。」

といふと、アーシャはふつと面を擧げて、眞顏になつて佶と私の面を凝視て、

「貴君は私は笑ふ外何も能がないと思召して？」

と云つて、突と起つて行かうとした……

書物の標題を見れば、何か佛蘭西の小説であるから、

「然し、こんな書物ぢや仕方がありませんね。」

「では何な書物なら可くつて？」と書物を机の上へ放下して、「それより

か矢張お轉婆でも爲て來ませう、」と庭へ駈出して了つた。

其晩私がガキンにヘルマン、ウンド、ドロテアを朗讀して聞かせてゐ

ると、アーシヤは初は傍でちらくらしてゐたが、其内にふと立止つて、

耳を傾けて、密と私の側に坐つて、結末まで聞いてゐました。それから

其翌日になると、全く別人のやうに爲つて了つたが、是はドロテアの如

うに所帶じみた、眞面目な風にならうと氣紛れたのでせう。兎も角も奇

怪な娘であつた。非常に負嫌の、何か此方で快く思はぬ事がある時でも、

尙ほ何となく愛しらしい娘であつた。唯私が親しめば親しむ程、疑なく

思つたのは、此娘はガキンの妹でないといふ事で。ガキンがアーシヤを

遇らふ樣子は兄妹らしくない。餘り柔しく、甘やかし過ぎてゐながら、

何處か無理な處もある。

ふと奇異な事に出合つて、私の疑は殆ど霽れた、とサ思ひました。

或晩例の葡萄圃へ來て見ると、門に鎖が下してある。熟くも考へずに、

此前見附けて置いた垣の破目へ來て、其處を躍越した。其處から少し離

れて、路傍にアカチヤで出來た小さな四阿屋がある。其四阿屋の傍を行

過ぎやうとすると……ふとアーシヤが熱心になつて、泪ながらに、こん

な事を云つてゐるのが聞こえた。

「厭、厭、私は、貴方の外は誰の事を思ふのも厭。何と仰しやつても、

貴方ばかりの事を思つてゐたいわ——死でも思つてゐたいわ。」

するとガキンの聲で、

「最う措焉、アーシヤ、そんなに氣を揉まんが可い。余は汝のいふこと

を疑ぐりはせんよ。」

二人の壁は四阿屋の裡にする。私は絡合た木の枝を透して二人の姿を認め得たが、二人の者は私が居やうとは夢にも思はぬ樣子であつた。

「貴方ばかりが宜わ、」と重ねて云つて、アーシヤはガキンの頸へ手を掛けて、啜上げて泣きながら、接吻して、莽とばかり抱付いた。

「措焉、分つたよ、」と云つて、ガキンは輕とアーシヤの頭を撫でゝゐる。

私は少時立壁に凭むでゐた……が、ふと我に復る途端に、彼處へ往つたものかしら？……いや、如何してそんな事が！と頭の中で閃めく。足疾に垣まで引返して、それを躍越して、往來へ出て、殆と駈出さぬばかりにして宿へ歸つて來た。歸つて來て、微笑するやら、手を揉むやら、偶然した事で疑の霽れたのを（夢にも思違ひとは思はなかつたから）疑の霽れたのを奇異に思ふやらしてゐたが、其癖恨めしいは一通でない。心の中で「だが、假爲れば假爲られるものだなア！　然し何の爲にあんな眞似を爲るんだらう？　余を欺いたとて、所益があるまい。こんな事

を彼男が爲やうとは思ひ懸けなかつた……それに、如何だあの舌足るさは？　ヘッ！」

（七）

其晩は寢苦しく明して、翌朝夙く起きて、背嚢を負つて、宿の主婦さんには晩には歸らぬと云置いて、それから某町の傍を流れる河に沿いて、徒歩で山へ登りました。此山は犬が脊（Hundsruck）といふ山脈の分派で、珍らしい地質の山である。殊にそのペザリト層が雜物もなく、界目も正しくて妙であるが、然し今は地質の研究どころでは有りません。自分でも如何いふ心地になつたのか、善くも辨なかつたが、唯二人の者と面を合せたくないと思つたゝけは確である。別に仔細と云つてはないが、唯彼等の卑劣なことを念ふと、口惜しくて耐らぬので、それで急に二人の者が厭はしくなつたのだと、自分では辯解してゐました。何の必要があ

つて、兄妹らしく見せかけて居るものが、更に判りません。けれども私は成るべく二人の事を念ふまいとして、山となく、谷となく彷徨ひ歩いて、或は飯屋の店に休むで、亭主や客と長閑に語合つたり、又は圓平な駿な石に横臥で、雲の行くのを見送つたりしてゐましたが、幸ひ天氣は極く上天氣で。斯うして三日程を送りましたが、少しは面白いやうな氣もしました、尤も折々は戀ぐこともあつたが。兎に角此逸の穏かな風土に相應しい心地になつてゐました。

果敢ない事が閑に眼前を移行くのを見てゐると、折に觸れて色々の感じがするから、それに身を任せてゐましたが、その感じが徐に逐ひつ逐はれつして、心の中を流れて去つた跡には、此三日間に觀たり、聞いたり、感じたりした所有ものを、一ツに籠めた心地が殘りました——處々の森の松脂の幽かな香やら、啄木鳥の啄く音やら、底の砂地にフオレー名魚の狂ふ清い流の響くも斷えぬ水音やら、さして險しくもない山の

姿やら、突兀たる岩石やら、尊氣な古寺や物蒼りた樹立の見える清潔な村やら、野に下立つた鵠鳥やら、水車の眼まぐるしく回轉る洒落た粉磨場やら、農夫の忠實な面やら、その水色のカムゾール上衣の名やら、鼠色の靴足袋やら、肥えた馬の、或時は牝牛の軛ませて行く優長な荷車やら、林檎や梨子の樹を兩側に植ゑた清潔な路を若い長髪の旅人が行く姿やら、所有ものを籠めた心地が殘りました…

今ですら、其時の事を憶出すと、快くなります。獨逸の片田舎で、さして富裕な地とも見えなかつたが、其代り何處を見ても辛苦の痕、急かず氣永に勞力を加へた痕を留めて、善い處でした…どうぞ彼處だけは浮世の暴風に當てたくないものです。

宿に歸つたのは三日目の夕暮でした。まだ話し遺した事が有つた、私は二人の者を快く思はぬ餘り、例の難面い寡婦さまの保を心中に呼戻さうとして見たが、無駄でした。忘れもせぬ、私が此女の事を思はうとす

ると、五歳ばかりの農夫の娘が、邪氣ない眼を圓くして、物珍らしさうな、圓々した面をして、私の前に佇立りましたが、其娘がさも小兒々々した、罪のない風で私の面を凝視るので、その清い眼にも耻かしくなつて、如何もその前では僞りたく無く爲つたから、早速今迄の戀人の事は永く思棄てゝ了ひました。

宿にはガギンの手紙が屆いてゐました。手紙には私の思立の唐突なのに驚いた事、彼を誘合さなかつたのを恨に思ふ事などが陳べてあつて、歸つたらば、直ぐ訪て貰ひたい、としてある。私は此手紙を見ると、何となく不快を感じたが、それでも翌日某町へ出かけました。

(八)

ガギンに逢へばさも懷かしさうで、種々恨を云つても、尙ほ親しみといふものを失はなかつたが、アーシヤは何だか意あつて爲た如うに、私

の面を見ると、唐突に高笑をして、例の通り直ぐ駈出して行つて了ひました。ガギンも極り悪く思つたと見えて、妹の後影を目送りながら、口の中で宛然で狂人だと云つて、私には詫を云ひました。實は私もアーシヤに對しては甚だ不滿でした。いとゝ不愉快である所を、またあんな故意とらしい笑方をして可怪な面色をする！　けれども私は素知らぬ面をして、ほんの旅行の眞似事をした、その話をしてゐました。ガギンも私の留守中に爲た事の話をしたが、如何も話に氣が乘りません。アーシヤは座舗を出たり、入つたりしてゐます。そこで遂に私が急ぎの仕事が有るから、最う歸らなければならぬと云出すと、ガギンは初の内は引留めてゐたが、漸て凝然と私の面を瞶視めて、それでは送つて行かうと云ふ。入口の間へ出ると、アーシヤが出つて來て、私の方へ手を出すから、私は輕く其指頭を握つて、一寸會釋をしました。それからガギンと二人でラインを渡つて、マドンナの像の側の、例の氣に入りの素皮の前を通ら

うとして、其處の床几に腰を掛けました。些と景色でも觀て行かうといふ積で。其時二人の間に妙な話が始まりました。

初の内は二言三言物を云つてみたが、果は互に默つて了つて、河水の白々と光るのを眺めてゐると、

ガギンは例の莞爾々々としながら、ふと話しかけました、

「時に貴君はアーシヤを如何思ひますか？　すこし變に見えはしませんか？」

ガギンが正かアーシヤの事を云出しはすまいと思つてゐたから、私は少し當惑して、

「然うですな。」

「彼女の評をするなら、先づ性質から熟く知らんければ不可ですが、全躰極く人は善いけれど、少し危險な女ですよ。だから隨分持餘すことが有ります。然しさう云つては、實は可哀さうなので。貴君は彼女の經歷

を御存じないから、何だけれども……」

「經歷を？……でも彼方は何ちやありませんか、貴君の……」

ガギンはヨロリと私の面を見て、」

「妹でないと思つてお出なさるんですか？　然うぢやないんです（と私の狼狽するには頓着せず言葉を繼いで）、全く妹で――異母の妹です。お話すれば、一躰かういふ譯で。私は貴君を信ずるから、總て打開けてお話して了ふが、

私の父といふのは極く人の善い人で、隨分物も解つてゐたし、教育もあつたが――唯不幸な人で。と云つて、何も尋常外れて不幸であつた譯ぢやないが、最初一寸蹉跌たので、それで最う意氣地が無くなつて了つたのです。まだ若い時、私の母が氣に入つたとか云つて、結婚したのださうですが、母は直に亡なりました。恰ど私が生れて六ヶ月目でしたら。それから父は私を伴れて田舍へ引込むで了つて、全十二年といふも

のは何處へも出ずに、私の教育にばかり從事つてゐたさうです。如何かで、私の實の小父ですな、それが訪つて來ました。此小父といふのは始終ペテルブルグに住まつてゐて、可なり勢力もあつた人でしたが、是が頻に私を預からうと云つて、父に說いたのです。父は如何あつても田舍を離れるのは厭だと云ふものですからね。小父の考では、私のやうな少年が世間見ずに成長しては、利益にならぬ。また父のやうな、陰氣な、沈默した者の手に育つては、必ず時勢に後れる。それに斯うして置いては、自然風儀も惡くなる道理だといふので、頻に父に說いたのださうです。父も初は容易承知しなかつたが、それでも遂にそれではと云ふ事になる。いざ別際となると、私も泣きましたよ。父の笑面と云つては、曾て見たこともなかつたが、流石に親だから、戀しかつた……ですがね、ペテルブルグへ出ると、直に面白くもない陰氣な家の事などは忘れて了

ひました。下士學校へ入つて、それを卒業してから、近衞聯隊に附きました。毎年數週間は必ず田舍へ歸ることにして居ましたが、歸つてみる毎に、父は益々憂鬱になつて、陰氣になつて、意氣地がないと思ふほど懊惱する。毎日のやうに會堂へ行く。それは可つたが、殆ど口といふものを開かなくなる。或年私が歸つてみると（恰ど二十歳ばかりの時でしたが）、家に痩せた、黑眼勝な、十歳ばかりの女の子が居ます――これが今考へてみれば、アーシャでさ。父のいふのには、此娘は孤兒だから、引取つて世話をしてゐる――とかうまア云ふのですよ。私は別段氣にも留めなかつたが、是がまた非常に人見知をして、敏捷かつたが、始終默つて居る、宛で野獸か何かのやうな娘でね、私が父の氣に入りの座舖へ、これは廣い、薄闇い、晝でも蠟燭が點いてゐやうといふ座舖で、母が死ぬまで寢てゐた處ですが、其處へ入ると、其娘は父のに定てあつたヴォルテール椅子の蔭やら、書棚の蔭やらへ隱れて了つて、如何しても出て

來ないです。父は毎月短い手紙を寄しましたが、アーシャの事は稀にしか書いて贈さない――それも何かの筆敍でなければ。其時分父は最う五十近くであつたでせうが、見た所ではまだ〳〵壯いものでした。ですから私も驚いたね、何にも知らずに平氣で居る所へ、手代から手紙が屆いて、開封して見ると、父が危篤だから、早速歸つて呉れろ、暇取れば死目に逢へんかも知れん、としてある。取る物も取り敢へず、歸つて見ると、まだ歿しはしなかつたが、最う難しいといふ所で。非常に私の歸つたのを喜んで。痩せた腕で私を擁へて、何だか斯う吾の腹を探らうとするやうな、何か頼みたさうな、變な眼付をして、私の面を覗込んでさ、而して私に父の遺言なら、如何な事でも承知するといふ誓言を立てさせて、それから從來側使に使つてゐた老夫にアーシャを伴れて來させたが、アーシャは凜然震へて、殆ど立つて居かねるやうでした。

父は辛うじて、

「これは私の娘だ――お前の爲には妹だが、之を當に殘すから、何分頼む。委細は（と側使の老夫の面を視て）このヤーコフが承知してゐる。」

アーシャは大泣に泣いて、寢臺へ面を埋めてゐました……三十分も經つと、父は到頭目を瞑つて了ひました。

後で聞けば、かういふ譯で。アーシャは舊と母の小間使であつたタチヤーナといふ者の腹に出來た兒で。私はこのタチヤーナを未だ善く記憶してゐます。すらりとした好い姿で、美しい威のある利口さうな面相で、黑眼勝な大きな眼の女でしたが、傲慢でなか〳〵負けぬ氣であつたさうです。ヤーコフも遠慮して、判然した事を云はなかつたが、其口裏で察して見ると。母が死でから二三年して、父は此女に關係したらしいのです。其時分タチヤーナは最う家を退つて、妹が嫁いて牛飼をしてゐたが。其家に同居してゐました。父は大層タチヤーナを愛して、私がペテルブルグへ出た後では、妻に爲やうとまで思たのださうですが、何分タチヤ

ーナが承知しない。

ヤーコフが例の通り手を背後へ廻してね、座舗の入口に立つてゐながらの話だが、タチヤーナはなか〳〵思慮の有る女だから、父の顔に關はるやうな事は爲たくないといふので、父に對つて、私は貴君のやうな方の妻といふ人躰か、奥樣なぞに爲れると思ふかと云つたさうです。それはヤーコフも聞いてゐたさうです。といふのでタチヤーナは家へ入るのを拒むで、相變らずアーシャと一所に妹の家に厄介になつてゐました。私はタチヤーナには少年の時祭日に會堂で逢ふばかりでしたが、何時も熏むだ色の頸卷をして、黄ろいショールを披つてゐましたつけ。而して群聚に交つて窓の邊に立つてゐたから、威のある横面が清いながラスの地に劃然際立つて見える。其中に古風に低く拜をして恭しく祈禱を始める——まだ善く記えてゐますよ。私が小父に伴れられて行つた頃は、アーシャは未だ二歳ばかりであつたですが、九歳の時に母を喪しました。

タチヤーナが死ぬと、父は直ぐアーシャを引取りました。其前からアーシャを引取りたく思つてゐたのださうですが、タチヤーナはそれをも承知しなかつたのです。さア今迄旦那〳〵々々と云つてゐた人の側へ引取られて來たのだから、アーシャの心も變らずには居ませんわ。生れて始て絹布を衣て、皆に手に接吻された時の事は今だに未だ記えてゐると云ひますよ。生母の存生中はなか〳〵嚴しく躾けてゐたさうだが、父の方へ引取つてからは、萬事氣隨にしておく。甘やかすの、猫可愛がりに可愛がるのといふ譯ではなかつたが、然し父は深くアーシャを愛して、何事も爲てはならぬと云つて制した事はなかつたさうです。といふも畢竟アーシャに對して濟まぬと思ふ氣が十分にあつたからでせうよ。アーシャは直に自分は此家の主人株で、旦那といふのは矢張自分の父だといふことを合點したが、それと同時にまた自分の身分の變なことをも悟つたから、そこで不負魂が大に跋扈すれば、猜疑の念も增長する、惡い習慣が

根を張る、自然の處が滅なる、といふ始末で。曾て私に懺悔をしました が、世界中の人が皆如何かして自分の素生を忘れて呉れゝば好、と思つたこともあるさうです。母が母だから耻かしくは思ふが、そのまた耻かしく思ふのを耻ぢて、畢竟母を自慢にするといふ氣にもなる。ですから彼女もなか〳〵苦勞を爲て來たもので、彼女の年頃では知らんでも可い事を隨分知つてゐますよ。けれども然うだからと云つて、彼女の惡いのではありませんさ。氣力は壯で、血氣は沸返へる、ところが傍に氣を注ける者が居ない……萬事氣隨氣儘にしてゐられる！　然し此又氣隨氣儘といふ奴が極く處し難い奴ですからね。然うぢやありませんか？　他の令嬢達に負けたくないから、讀書に耽る。といふ有樣であつて見れば、如何なるもんですか？　結局變則に始まつた生涯は變則に成立つて了つたが、然し性根まで腐りはしません。分別は矢張儼然としてゐます。

そこで二十歳のお坊さんの私が十三の小娘を擁へて世に立つことゝなつた。父の歿した當座は私の聲を聞いたばかりで、アーシャは熱にでも罹つたやうになつて、柔しくすれば鬱ぐといふ始末であつたが、それでも段々少しづゝは馴染むで來る。尤も其後私が眞實彼女を妹と思つて愛することが判つてからは、深く私に親むで了ひました。彼女は何でも善、加減に思つて置くことの出來ない性質ですから。

それからアーシャを伴れてペテルブルクへ出ました。彼女と別々になるのは誠に辛かつたが、如何も一所に居る譯にもいかんから、評判の善い或る學校に入れました。彼女も別々になるのは已むを得ない譯だと納得はしたやうなものゝ、其當座は病氣を惹出して、一時は殆ど難かしい程でしたよ。でも其後漸く勘辨が出來て、其學校に四年居ましたが、私の豫期は全然外れて了つた。矢張以前のアーシャでさ。さしたる變もありませんや。彼女の事では校長も數々私に苦情を云ひましたつけ、「罰しても効がないが、優しくしたつて、そんな手にはお乘なさらん、」といふ

でさ。非常に理解が善くつて、日々の課業も僃輩よりは善く修つたさうですが、如何しても人並にしてゐることを嫌つて、意地を張つてみたり、拗ねてみたりしたさうです……けれども私には彼女を然う責めることは出來ない。彼女の身になつて見れば、人に諂ふか、逆ふかせずには居られなかつたでせうさ。多くの同學生の中で、彼女の親密にしたのは唯た一人であつたが、それも色々艱難をして來た、哀れな、不器量な娘だつたさうです。他に幾らも同學の令嬢達はあつても、大抵身分の善い人の娘さんたちだから、皆アーシャと仲惡で、精一杯毒を言つたり、諷刺つたりしたさうですが、アーシャは一歩も讓らなかつたと云ひます。或時なんぞは、尤も聖書の授業時間だつたさうだが、教師が罪といふ事の話を始めると、アーシャが何と思つてか、大きな聲で、「阿諛と臆病とが罪の中でも一番惡い罪です、」と云つたさうです。といふ有樣で、畢竟彼女の行狀は改らなかつたが、然し以前よりは品格が善くなりました、尤も

これとても大して善くなつたとも思へないが。

彼此する内に彼女も十七になる。最うさう〳〵學校に處く譯にもいかんぢやありませんか。私も大に困つたね。如何しやうかと思つてゐる中に、ふと其策が浮んだ。これは何でも退職にして貰つて、アーシャを伴れて一二年外國へ出掛ける事だ。それが好いと思つたから、思立つた通り爲遂して、今御覽の通り二人でこんな處へ來て、私は畫を修る、彼女は……相變らずお轉婆を爲たり、狂人じみた眞似をしたりしてゐるのです。かうお話をしたからは、貴君も最う彼女のことを然う酷には評して下さらんでせうね。妹は何な事があつても平氣な面をしてゐますが、實はなか〳〵人の所思を憚つてゐるのです。ですものを貴君の所思なら尙更でさ。」

と云つてガギンはまた靜に微笑を漏したから、私はッと其手を握りました。

ガギンは復た言葉を繼いで、

「マアざつと斯ういふ始末なんですが、彼女にも隨分困りますよ。宛で火藥か何ぞのやうな氣性ですからね。まだ誰も好いた者はないが、好いたとなると、大變ですて。私も彼女には時としては持餘すことがある。此頃も飛でもない事を言出すんですよ。突然にね、私は以前よりも冷淡になつたが、自分は私ばかりの事を思つてゐる。永久私一人を愛する積だ……と云つて、大泣に泣くんでさ……」

「成程それで……」と口まで出かゝつたが、グッと呑込むで了つて、更に出直して、

「では何ですか――最う斯う打開けたお話になつたから伺ふが――實際まだ誰も氣に入つた者はないのですか？　ベテルブルグでは隨分若い男を御覽なすつたらうが……」

「そんな人達は些ども氣に入らないのです。そんなのは無益で、アーシ

ヤには豪傑とか、非常な人物とか言はれる者でなければ、山の峽間にでも住むでゐやうといふ、繪にあるやうな牧者でゝもなければ不可のです。然し長談でお引留め申してさぞ御迷惑でしたらう。」

と云つて起上つたから、

「如何です、最う一度貴君の所へ往きませうか？　何だか宿へは歸りたくなくなつた。」

「では仕事は如何なさる？」

私が何とも返答をしなかつたので、ガギンも毒のない微笑を漏して、それから連立つて某町へ引返しました。目馴れた葡萄圃や、高臺の白ペンキ塗の家を見た時には、私は味で云つたら先づ甘たるいと云つたやうな心地がしました――宛で蜜でも嘗めさせられたやうな鹽梅で。ガギンの話で胸が透いたやうになりました。

(九)

アーシヤは戸口の處まで出迎に出て來ました。また笑ふであらうと思の外、その出て來たのを見ると、色が蒼ざめて、默然として、下目を遣つてゐます。

「またお出でなすつたよ。此度は御自分から思立つて。」

とガギンが云ふと、アーシヤは不審さうに私の面を見るから、私は手を出して、此度はツッと其冷切つた指頭を握りました。私は如何にもアーシヤが可傷い。此娘の爲る事には以前は全然了解ぬ處があつたが、今となつて見れば、何の了解ぬことは些ともない。內心に靜定がないのも、端然としてゐることの出來ぬのも、街つて見せたく思ふのも——其主意は善く解る。私の觀た所では、此娘は人知れず始終胸を惱ましてゐるのである。未だ世の味といふものを知らぬから、動もすれば、修羅を炎し

て焦心するやうなものゝ、心は常に眞の道を辿らむとする傾を持つてゐるのである。如何してこんな可異な娘が私の心を動かしたのか、漸く理由が判つた。成程此娘の優姿には稍々野の花見るやうな美がないではないが、それば かりが私の心を動かしたのではない。私の氣に入つたのは實に此娘の心である。

ガギンは畫稿を覆へして、何か探し始めたから、アーシヤに葡萄圃を一所に散歩しやうと勸めると、機嫌よく柔順に承知しました。そこで二人連立つて高臺を下りかけて、其處の大きな平たい石に腰を掛けました。

アーシヤが先づ口を開いて、

「貴君は私共が御一所でなくて、お淋しくは有りませんでしたか？」

「貴嬢は私が參らんで、淋しかつたのですか？」

アーシヤは私の面を流眄で見て、

「淋しう御座んしたわ、」と答へるより早く、「山は好う御座んしたか？」

と直ぐ言葉を繼いで、「高くつて？　雲よりも高くつて？　山は如何なだつたか、話して聞かして頂戴な。貴君は兄にはお話を爲すつたでせうが、私は未だ些とも伺はなかつたから。」

「でも貴嬢は他處へ往つてお了ひなすつたのだから、仕方がない。」

「他處へ往つたのは……アノ……何だつたものですから……其代り今度は最う何處へも往きませんよ、」と裏のない所を愛想よく云つて、「貴君は今日は憤つて居らしつた。」

「私が？」

「はア。」

「飛でもない。何で貴嬢……」

「それは如何だつたか、善くは知りませんがね、何だか憤つて居らしつたやうで、お歸なさる時も、佛然して居らしつたわ。あんな風をしてお歸なすつたから、私は何だか厭でならなかつたけれど、歸つて居らしつ

たから、嬉しいわ。」

「眞個に歸つて來て好かつた。」

少年が心地の快い時に屢く爲る事だが、アーシヤは一寸肩を搖つて、

「私は人の心を察しることが上手よ。子供の時にも、父が隣座敷で咳拂をすると、それを聞いたばかりで、私に對して不滿か、然うでないか、直に辨りましたよ。」

今日までアーシヤは曾て父の事を言出したことが無かつたから、此言葉を聞くと、私は珍らしく思つて、

「貴嬢は御父樣が好きでしたか？」

と何心なく云つて、ふと赤面したが、赤面したと思ふと、非常に殘念であつた。

アーシヤも何とも返答はせずに、同じやうに赤面した。二人とも默つて了つて、遙か前方のラインに漁船が烟を吐いて行くのを眺めてゐると、

聽てアーシャが低聲で、

「何故お話なさらんの？」

「貴嬢は何故今日私の面を見てお笑ひなすつた？」

「何故だか、自分にも分りませんわ。どうかすると、泣きたくなつて、それでおて笑ふことがあるんですものを。ですから貴君もその積りでおて頂戴よ。私の爲る事と心持とは大變違ふことがありますから。ア、それは然うと、ロレレヤの噺ね、あれは面白い噺ですね。彼處に見えるのがアノ岩なんでせう？　初は衆人を溺らしておたのが、人を愛したもんだから、此度は自分で身を投げるやうに爲つたんですとね。私はあの噺が大好。フラウ、ルイゼは色々な噺をして聞かせますよ。彼處の家には眼の黄ろい烏猫が居て……」

面を擧げて、捲髮をばらつと振亂して、

「嗚呼快い心地だこと！」

此時單調の聲が斷續して聞える。大勢の聲で、拍子を整へて讃美歌を唱つて行く。神詣の人が大勢揃つて、十字架や聖像を捧げて、下の往來を練つて行くのである。

アーシャは漸々に遠かつて行く人聲に耳を傾けておたが、

「あの中に交つて行つたら、好からうねえ！」

「貴嬢はそんなに信心家ですか？」

「何處へでも可いから遠方へ、お詣にでも何でも人の出來ないといふ事を爲に往つたら、好いでせうと思つて。でないと、段々年ばかり加つて、何も出來ずに了ひますものを。」

「貴嬢はなか〳〵功名心が熾だ。空しく一生を送りたくない、死後に名を留めたい、といふのですね？……」

「だつて出來ない事ですか？」

「出來ない事です、」と云はうとしたが……アーシャの明々した眼付を見

ると、忽ち氣が變つて、

「まア試つて御覽なさい。」

アーシャは暫らく默然としてゐたが、其時疾うから蒼ざめてゐた其面に何か醫と見えたかと思ふと、直ぐ消えて了つたものがある。暫らくして、

「アノー貴君は大變好いて居らしつたの、彼方を……記えて居らしつて？そら貴君とお相識になつた二日目に城趾で兄が健康を祝するんだつて、麥酒を飲みましたらう……ね、彼方……」

私は笑出した。

「あれは令兄が戲言を言つたんですよ。私は誰も好いた者はない。少くも今の所では先づない。」

「女の如何いふ處が好くつて？」

と一寸首を傾げて邪氣ない面をする。

「妙な事をお聞きなさるね！」

と云ふと、アーシャは少し狼狽して、

「ア、こんな事を伺ふもんぢやなかつたづけ。ね、然うでせう？　失禮でした、私は何でも思つた事を直ぐ口へ出して言つて了ふのが癖。だから物を言ふのが心配ですわ。」

「いや、心配なんぞ爲さらんが可い。何卒關はずお話しなさい。私は貴嬢が漸く遠慮が無くなつたので、非常に喜んでゐる。」

アーシャは少し羞らつた躰で、温雅に輕く笑つた。私はアーシャの斯ういふ笑方をするのを始て聞きました。

「では貴君が何かお話をなさいよ。」

と云ひながら、アーシャは衣服の裾を撫でゝ、足の上へ引張り上げて、永く腰を掛けてゐさうな風をして、

「お話をなさるか、でなければ何か讀むで下さいな。そら此間オチーギ

ンを讀むで下すつたでせう――ね、あゝいふ樣に…」

ふと何か考へて、

"幸なかりける垂乳母の、
"墳墓の上に建てたりし、
"十字のまるし今ははた、
"如何なりけむ影もなく、"

と中音に謳する。

「違つた！　アーシヤンのは然うぢやない。」

「私はタチヤーナに成りたいわ、」と矢張考へながら、言葉を繼いだが、ふと又氣を變へて、「何かお話して頂戴よ。」

然し私はなか〳〵お話どころでは無かつた。アーシヤを見れば、滿身に華やかな日光を受けて、沈着いて、温雅としてゐる。四邊は天も地も一躰に燦爛と光り耀いで、空氣までが鮮に見える。

「あゝ佳い景色だ！」

と我知らず低聲で云ふと、アーシヤも私の面は見ずして、同じやうに靜に、

「眞個に佳い景色ですねえ！　私達も若し鳥だつたら、舞上つたり、飛んで行つたり……あんなに蒼空に消えて了つたりしられて快いでせうねえ……鳥でないから、不可けれども……」

「人にだつて羽が生えることが有りますさ。」

「まア如何して？」

「年齡を加つて御覽、自然と悟る。感情には人を天へ昇らせるのが有るから。貴嬢にも必然生えるでせう、心配なさらんでも。」

「貴君には生えたことが有りますか？」

「然うですねえ……未だ私は飛だことは無いやうだ。」

と云つてもアーシヤは眞面目なもので、復た考へ出す。私は少し屈む

で、アーシヤに寄添ふやうにしてゐた。

「貴君はアリスを聞かぬッが踊れますか？」

と突然問はれて、少し方角が附かなくなつたが、

「踊れますとも。」

「ぢや歸りませう、直ぐ……而して兄にクリスを奏いて貰つて、私達は……アノ……羽が生えた積で、踊りませう。ね？」

アーシヤが住宅の方へ駈けて行くから、私も續いて駈出して、纏てラッパルの妙音に連れて、二人じで狹い座敷を狂ひ廻つた。アーシヤは興に乘つて、なか〳〵巧に踊りました。一躰アーシヤの面相は娘々しては居ても、何處か威があつたが、この時はかりは急に柔しく女らしくなりました。私はその後何時までもアーシヤの纖やかな身躰に觸つてゐるやうな、急しくなつた息氣遣がつい傍で爲るやうな、蒼ざめては居たけれど、活々した面を捲髮で勢よく拂つて、黑眼勝の眼を殆ど閉むるばかり

に細めて据えてゐるのが、眼前に隱現くやうな氣がして耐らなかつた。

(十)

此日は三人小兒のやうになつて、終日遊びましたが、いや面白い事でした。アーシヤは大層愛くるしくなつて、少しも氣取らなかつたので、ガギシも其擧止を見て悅んでゐたやうです。私は夜更けてから歸りました。ライノの河心まで來た時、船頭に船を下流へ流せと命じたので、老夫がぐいと櫂を引揚げると――人も舟も大河の水に奪られて行く。私は四方を顧望したり、物音に聽入つたり、昔を憶出したりしてゐたが、その中にふと心の底の方で何を悶えるともなく悶え出す。空を仰いで見れば、空も落着かぬ氣色で、一面に星が醉れて、うよ〳〵ぞよ〳〵と、慄へるやうに光つてゐる。河を覗いて見れば、此處も同じ事で、薄闇い、冷々とした深處に、星影が搖めきつ戰きつしてゐる。何方を向いても、

ごた〳〵として賑かなので、心は益〳〵落着かない。舷に肱を持せてゐると、風の耳元に囁く聲や、涙の幽に艫を洗ふ音が神經を弄るやうで、涼しい水氣が立つてゐても、なか〳〵頭は冷えない。岸で鶯が啼いてゐたが、その走ほらしい聲までが人の心を誘ふやうである。私は覺えず泪ぐむだが、それも何に感動するともなく感動して泪ぐむだのではない。それかと云つて、心が大きくなつて、奮ひ出して、万物の情が總て了解めて、世の中の物が皆愛じらしく思はれる時、如何と押へて云ひやうもないが、何も彼も一時に如何かしたいやうな心地になるもので、既に此頃も然うしたことがあつたが、私の感じた所はそれでもない。そんな事ではないが、唯幸福を得たいといふ欲がむら〳〵と起つたのである。其時は未だ此欲の眞の名を言ひ得なかつた——唯幸福を得たい、幸福に飽きたいで、悶々としたのである……

舟はどんどと流れる、船頭を見れば、楫に凭れて假寢をしてゐます。

(十一)

翌日もガヰンを訪ねるとて宿を出ましたが、私はアーシヤを好いたのか、好かないのか、そんな事は少しも考へずに、唯アーシヤの事を色々考へて、其身の上を哀れに思たり、思懸なく隔心がなくなつたのを喜んだりしてゐました。アーシヤの氣心は昨日始て知れました。それまではアーシヤは彼方向いてゐたやうなものです。さてかう本體を拜むで見ると、その面影までが恐ろしく美しくなつて、如何にも珍らしく見えるのみならず、眉宇の間に何やら人の魂を奪ふものがほのめくやうにも思はれる……

前方に白々と見える例の家を絶えず眺めながら、私は馴れた徑をいそ〳〵と歩いて行きました。遠い未來の事などは勿論、明日の事をも思はなかつた。唯洵に愉快であつた。

ずつと例の座敷へ通ると、アーシヤは面を振めたが、見ればまた靚粧してゐる。けれども、服裝には副はぬ面色で、愁然としてゐます。私の浮々として來たのとは大分の差だ。私の面を視るとその儘、例の通り駈出じさうにしたが、それでもじつと耐へて、座敷に留まつてゐました。美術家といふものは、所謂自然の尻尾を捉へたと思ふと、病の發作したやうに俄に技癢を感じて、妙に氣が荒くなるものであるが、ガキンも恰どさうした心地になつてゐる時と見えて、頭髪を散らして、滿身顏料に塗れて、框張の布に對つて突立つてゐたが、腕一杯に刷毛を揮廻しながら、私には怕ろしい面をして顧でしやくつて見せたばかりで、直ぐ一足後へ却退つて、眼を細くして見て、また繪に取掛るといふ爲體である。それを妨げるも心ないと思つたから、私がアーシヤの傍に腰を掛けると、黑眼勝の眼が徐に此方を向きました。

ちと機嫌を直させやうと思つて色々骨を折つて見たが、その効がなか

つたので、遂に「貴嬢は昨日と今日とは全で樣子が違ふ」と云ふと、アーシヤは沈着いた、籠つた調子で、

「然うでせう。でも何でも有りません。唯昨夜熟く眠なかつたもんですから――終夜考へてゐて。」

「何をそんなに？」

「色々な事を考へましたの。小兒の時からの習慣ですわ。まだ母と……」

母といふ時は、餘程骨の折れた樣子であつたが、更に出直して、

「母と一所に居る頃から然うでしたわ……昨夜もね、いろんな事を考へましたの……あの何でせう、誰でも自分で自分が如何なるのだか判らないことが有るでせう。時とすると斯うなると不可と思つてゐても、如何も然うなつて了つて、仕樣がないことが有るでせう、それから何時でも有の儘を云ふといふ事も出來ないもんでせう――何故だらうと思つて……それに考へて見れば、私は……あの……何も知らないから、些と稽古を爲

なければ不可と思つて。どうも私の教育は不十分だから、教育を仕直さなければ可けませんわ。ピアノも彈けないし、畵も作けないし、裁縫さへ拙くつて、何にかけても才がないから、私と一所に居たら、さぞ面白くなからうと思つて。」

「貴孃は自分を視ることが太り酷だ。書物も隨分讀むでお出でなさるし、教育もお有なさるし、また貴孃ほど才が働けば……」

「私は才女？」とアーシャが如何にも邪氣ない面をして問ふので、私は覺えず笑出したが、アーシャは莞爾ともしないで、「阿兄、私は才女？」と兄にも問ねた。

兄は何とも返答をせず、絶えず刷毛を取替へたり、高く手を擧げたりして、仕事を廢めない。

アーシャは尙ほ物思し氣な樣子で、

「私は自分でも何を思つてゐるのか、夢中の時がありますよ。だから自分でも時々眞個に心配になりますよ。あゝ如何かして私は……眞實でせうか、女といふものは餘り書を讀むでは不可といふのは？」

「餘計讀まんでも可いでせうが……」

「どんな書を讀んだら可いでせう？　一躰まあ如何したら可いんでせう？私は貴君の善いと仰しやる事なら、何でも必ず爲ますから。」

と邪氣なく人を依頼つて、面を覗込む。私は返答に當惑した。

「貴君は私のお相手で御退屈ではなくつて？」

「何のそんな事が……」

と未だ云ひきらぬ內に、

「そんなら善かつた！　私はまた御退屈ぢやないかと思つて。」

とアーシャが小さな腰つた手で私の手を握る途端に、

「某さん！」とガギノが大聲に呼んだ、「此地は少し黑過ぎはしなかつたでせうか？」

私はガキンの側へ行く――アーシャは座敷を出て行きました。

(十二)

一時間ばかりすると、アーシャは又座敷の入口まで來て、手招をして私を呼出して、

「あの變な事を伺ふやうですが、若し私が死だら、貴君は慾然だと思召して？」

「今日はまア如何したと云ふんです！」

「でも直に何だか死にさうな氣がしますものを、時々かう何を見ても最う是が見納のやうな氣がして耐らないことが有りますの。ですが寧そ死んで了つた方が優うございますわ、かうして生きてゐるよりか……そんなに人の面を御覽なすつては厭ですよ。何も私は僞言を吐きはしませんよ。そんなに爲さると、また貴君を畏がりますよ。」

「では貴嬢は私を畏く思つた事があるのですか？」

「餘程變に見えるでせうが、如何も私にも仕樣がないんですものを。私は最う笑ふとても出來ないわ……」

アーシャは日が暮れても、尙ほ鬱々として屈托さうな面をしてゐました。私には善くは判らなかつたが、何處か樣子の變つた所がある。動もすれば私の面を視るが、その可異な眼付で視られる毎に、私は胸が冷りとする。見た所ではアーシャは沈着いてゐるやうだが、如何も沈着いてゐるとは思はれません。けれども蒼ざめた面色や、力の拔けた氣の無い擧動に、何とも云へぬ優美の處があるので、私はそれを眺めて樂むでゐましたが、アーシャは何故か私を不機嫌だと思つてゐました。

歸らうとする少し前、アーシャが、

「某さん。私には何だか貴君が私のことを輕躁な女だと思つて居らつしやるやうで厭でならないんですが……あの、貴君、何卒是から私の言ふこ

と、を信じて下さいな、而して隔てなく交際して下さいな。私は貴君に對して取繕つた事なぞは最う決して云ひませんから、若し云つたら、如何爲すつても可いから……」

この「如何爲すつても可いから」がまた私を笑はせた。

「あら笑事ぢやありませんよ」、と鋭く云ふ、「そんなにお笑ひなさると、貴君が昨日仰しやつた通りの事を私も云ひますよ。何故お笑ひなさるつて」。少時して、「昨日貴君は人間にも羽が生えると仰しやつたでせう？……ね。肥えて居らつしやるでせう？……私にもあの羽が生えましたの。けれども飛んで行き所がなくつて……」

「何故ね？　貴嬢は何を爲さうと自由ぢやありませんか？」

アーシヤは憚る所なく、熱と私の眼を諦視てゐたが、嬌て眉を顰めて、

「貴君は今日は私を輕蔑して居らつしやる。」

「輕蔑して？　貴嬢を？」

「大分陰氣だね」、とガキンが私の言葉を奪つた、「如何です、また昨日の如くにクリスでも奏りませうか？」

「いや、いや、厭な事た！」とアーシヤは我と我手をぐつと握緊める。

「無理にとは云はんよ……そんなに厭なら……」

「厭な事た」、と著ざめて又云ふ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

ラインへ來て見れば、薄闇くて水勢は箭よりも急である。私は心の中で、「予の事を何とか思つてゐるのぢやないか？」。

（十三）

翌日眼が覺めるや否や、また「おれの事を何とか思つてゐるのぢやないか？」自分はアーシヤの事を如何思つてゐたのか、それは一向知りたくなかつたが、たゞこの無理笑をする娘の面影が深く心に浸みて、一寸は

なか〳〵消えさうも無いと云ふことだけには心付いてゐました。此日もかキンの宿で一日遊び暮したが、アーシャには一寸會つたばかりで。頭痛がして、氣分が悪いとか云つて、頭を縛げて、面も變れて蒼ざめてゐたが、重さうな瞼をして、二階を降りて來て、力なく微笑して、「なァに何でもありません、直に癒るでせう」、と云つて―その儘出て行つて了ひました。私は淋しいやうな、つまらないやうな、悲しいやうな、妙な心地になつたが、その癖いつまでも歸りたくなくて、晩くまで談話をしてゐました。けれども最うアーシャには會へませんでした。

翌朝になつても、如何やら夢現の境を迷つてゐるやうで、仕事に著手らうとして見ても、手に附かず。何をも爲まい、考へまいと思つても、それもならず。詮方なしに町を彷徨いて、宿へ歸つて、また宿を出ました。

すると背後から少年の聲で、

「もし〳〵某さんつていふな旦那ちやございませんか？」

振返つて見ると、小僧が立つてゐる。

「アンチットさんから」、と手紙を出す。

開いて見ると、成程アーシャの手で、尤もおどろな走書で、

『是非々々御目もじの上お話し申上度事候まゝ今日四時に城趾道の禮拜堂まで御越し下され候やうねがひ上ぐ　私事今日とんだ疎忽をいたし候何も御目もじの上くはしくお咄し申上べく候若しお差支へなくば御承知のよし使の者に御申聞け下さるべく候』

としてある。

「御返事は？」と小僧が問ねるから、

「承知しましたと云つて呉れ」、と云ふと、

小僧は駆出して行きました。

(十四)

宿に歸つて、どつかと坐つて、思案にくれた。心は甚だしく騷ぐ。アーシャの手紙を取出して、繰返へし〳〵幾回となく讀むでみた。時計を見れば、未だ十二時にもならん。

ふと戸が開いて――ガヤンか入つて來ました。

その面を見れば、雲が懸つてゐる。私の手を把つてじつと握つたが、何か心配さうに見えます。

「如何したんです？」

と問ねると、椅子を取つて私の側に座を搆へて、さも餘儀なささうに微笑しながら、吃り〳〵云ふことには、

「一昨日でしたか、長談をして貴君を驚かしたが、今日もまた一ッ驚かすことがあります。これが他の人ならば、私もかう直接に……何はしませんが、貴君は立派な方ではあるし、それに私には親友だ――ね、然うぢ

やありませんか？――だからお話をするが、何ですよ……妹が……その……貴君に眷戀してゐますよ。」

と聞くと等しく私は慄然として起上りかけて、

「えッ、何と仰しやる？　令妹が……」

「然うです〳〵。彼は實に狂人ですよ。お蔭で私まで狂人になりさうだ。唯幸な事には、彼女には僞言を云ふことが出來んので、何も彼も私に打開けて話して了ひました。でも潔白なものですよ！　だが彼女は一身を誤る、必ず誤る。」

「そんな事はない……」

「いや、ない事はないです。かういふ譯で。昨日一日何も喰べずに寢てゐましたが、何處が悪いとも云はない：尤もいつも然うですが。晩になると、熱が出たが、私はさして心配もしなかつた。すると今朝二時頃でしたらう、宿の主婦さんが私を驚して、令妹さんが加減が悪いやうだか

ら、往つて見て呉れといふのです。驚いて往つて見ると、彼女は衣服を
も着更へずに寢てゐましたが、非常な熱で泣いてゐるのです。頭は炎え
るやうで齒の根も合はぬやうだから、「如何したんだ？　病氣なのか？」といい
ふと、突然私の首に抱付いて、「若し私を殺ろしたくなくば、一刻も早く
携れて立つて呉れ」といふのです……私には何だか更に事由が解らんけれ
ども、仕樣がないから、色々慰めてゐましたが……益々泣立てる……その
内に、その泣く聲の下から、ふと……まあ、早く云へば、貴君を愛してゐ
ると云ふのです。これはお互に分別といふものが有る者には想像も出來
ん事だが、彼女は一躰深く物に感ずる。そのまた感じた所が非常な勢で
以て外に發する。それがいつも突然に起つて來て、而して既に起るとな
ると、最う到底も抑へきれないといふのだから、何の事はない、雷雨の
やうなものですな。」

かギンは何は談話を續けて、「それは貴君は甚だ何だ……人好のする方だ。

けれども如何して彼女が貴君の事を然う深く思込んだのか――實は私に
は解らん。自分では最初から貴君に何したのだと云つてゐる。それで此
間も私の外誰をも愛したくないと云つた時には、悲しくなつて泣いたの
ださうですよ。所が彼女は貴君に輕蔑されてゐる、どうも貴君は彼女の
素生を御存じだと思つてゐるのです。私に饒舌たらうと云ふから、勿論
饒舌ないとは云つて置いたが、彼女の迂散臭い處を嗅出す力はそれは非
常なものですからな。それで唯妄に立ちたがる、直ぐにも立ちたいと云
ふ。そんな事で揮曉まで掛つてゐましたが、到頭私に明日此地を去ると
いふ誓言を立てさせて――而して漸う眠入りました。それから私も色々
考へて、結局貴君とお話して見やうと決心したのは――成程私にしても
妹の云ふ事は尤だと思ふ、此地を去るのが一番上策だ。だから私も今日
既に妹を携れて立たうかと思つたのですが、少し思ふ事があつて、見合
せました。といふものは、事に寄ると……それは何とも云へん――貴君に

も、妹がお氣に入つてゐるかも知れん。若し然うなら、何も周章てゝ立つ必要はない。とかう思つたから、極の悪いのも何も忘れて…それに私も思當る事がないでもないから…貴君のお心を伺つてみることに決心したのですが…何でせうか…」とガキンは、氣の毒な、いひ出しかねて逡巡してゐたが、軈て「若しお氣に障つたら、御勘辨を願ふが」、と云繼いで、

「如何も私はかういふ事には經驗がないので…」

私はガキンの手を把つて、斷然と、

「では何ですな、貴君は私が令妹を好いてゐるか、否たか、それを確めたいと仰しやるのですな？　よろしい、私は好いてゐる…」

ガキンは私の面をじろりと見て、吃りながら、

「ですがね、貴君は結婚して遣つては下さるまい？」

「然う仰しやつては、私も返答に困る。まあ考へてみても下さい、今私が…」

「成程〳〵」、とガキンは私の言葉を奪つて、「勿論私は貴君に迫て返答を聞く譯にはいかん。それに一躰こんな事を伺へた筈のものではないのですが、ですが如何したら可いでせう？　火惡戯は出來ない。貴君は未だアーシャを善く御存じないのだが、彼女はかうなつて見ると、病氣を惹出すか、逃げるか、貴君に喚出を掛けるか、何を爲るか知れません。他の者なら隨分自分の心一ッに納めて置いて、時節を待つといふことも出來るでせうが、彼女にはそんな事は出來ません。彼女はかういふ事は今回が始てゝすからな――だから私も困るのですよ！　今朝も私の足下に膝を突いて、泣いたの泣かんのと云つて、それは非常でした。若しあれを貴君が御覽であつたら、私がかう心配するのも道理だと思つて下さるだらうと思ふ。」

私は思案にくれた。「貴君に喚出を掛けるかも知れん」、と云つたガキンの言葉は胸にひしと徹へた。かう敵手が正直に打開けて話をするものを、

此方ばかり隠蔽をするのは如何にも愧づべき事のやうに思はれたから、遂に、

「貴君の仰しやる通りだ。一時間ほど前に令妹から手紙が届きました。これです。」

ガギンは手紙を取つて走讀に讀むで、さて力なく手を膝に落した。その黙いた面色は可笑い程であつたが、然し其時はなか〳〵笑どころでは有りません。

ガギンは更に、

「貴君は、煩いやうだが、立派な方だ。が、まあ如何したら可いでせう？それも然うだが、一躰如何いふ了簡なのだらう？　自分から立ちたいと云つて置きながら、今さら貴君の所へ手紙を寄じて、疎忽をしたと云つて後悔する……而して又何時此手紙を書いたのだらう？　貴君に會つて如何する積なのだらう？」

と氣ほひ立つのを慰めて、さて出來るだけ氣を落着けて、これから如何しやうといふ相談を始めた。

結局かういふ事に相談を決めました。穏に事を納めやうとすれば、私がアーシャに會つて、胸を割つて談話をした方がよろしいから、然うすると。そこでガギンは宿に殘つてゐて、手紙の事などは一向知らん爲をしてゐる。而して晩に復た會はうと約束しました。

「私は深く貴君を屬望にします」、とガギンは私の手を握つて、「何卒私共兄弟を助けて下さい。が、どうしても明日は立ちませうよ」、と起上つて

「貴君は到底結婚して遣つては下さるまいから。」

「まあ晩まで待つて下さい。」

「それなら然うとしても宜しいが、貴君は到底結婚はなさらんよ。」

ガギンが歸つてから、私は長椅子に倒れて眼を閉つた。餘り色々な事を一時に感じたので、目が眩ふやうである。ガギンの隔てのないのも恨

めしいが、アーシヤも恨めしい。アーシヤが慕つて呉れるのは嬉しくもあるが、また迷惑でもある。何故兄に打開けて云つて了つたのか、更に其意が了解めん。兎に角急も急、殆ど瞬く間に運命を決めなければならんので、居ても起つてもゐられんやうな氣がする……

「十七ばかりの、而もあんな小娘と結婚する——馬鹿な、そんな事が出來るもんか！」と起直りざまに一喝した。

(十五)

約束の時間にラインを渡ると、對岸で今朝の小僧に出會つた。私を待つてゐたものと見える。

「アンチットさんから」、と小聲に云つて、また手紙を出す。

これは出逢の場所を變へた報知で、禮拝堂は廢めたから、是から一時間半經つて、プラウ、ルイゼの家に來て、樓下の戸を敲いて、三階へ上

れといふことである。

「今度も承知したつていふんですか？」と小僧が問くから、

「然うだ」、と云棄てゝ、岸傳に歩き出した。宿へ歸る間もないし、と云つて町を彷徨くのも氣が向かなかつたからで。郭を出ると、其處に小さな園があつたが、園内には投球戯の店が在つて、麥酒も賣つてゐる。私は其店へ入りました。年老つた獨逸人が最う幾人か投球戯を爲てゐる光景で、木の球が轉がる音がして、をり〳〵喝采が起る。眼を泣腫した小綺麗な婢が麥酒を持つて來たから、私が其面を覗くと、婢は周章て面を反けて彼方へ往つて了ひました。

傍に居た、肥つた、頬の赤い男が「ハンヘンは今日は大分御愁傷の躰だな。然しそれもその筈か、許嫁の御亭が兵隊に取られたんだからなあ」、と云ふ。婢を見れば、隅の方に小さくなつて、手を頬に加てゝゐたが、涙は指の股に傳はつて滴々流れてゐる。誰やらが麥酒を命ずると、婢は

其を持つて往つたが、又舊の所へ戻つて來た。その悲しさうな樣子に誘出されて、私も亦是から往かうといふ出逢の事を考へ出したが、いや、考へる事が皆心配な、陰氣な事ばかりだ。如何して平氣で此出逢に往かれたものでない。これが往つて、思合つた中の睦じい談話でもすることなら格別であるが、約束どほり辛い役目を仕課さなければならんのである。「彼女とは申戯は出來ない」、と云つたガキヤの言葉は肝に銘じた。一昨々日は小舟に乘つて涙に漂ひながら、幸福を待焦れて懊惱した癖に、今その幸福が望み通り降りかゝつて來れば――逡巡をして、遂に逃げる、いや、逃げなければならぬ仕誼となる……餘り唐突なので、途方に暮れる。本尊のアーシヤも懐かしいことは懐かしいが、あの通りの變物であるから、その情熱の熾なことや、その經歷や教育の事を思へば――内々薄氣味わるくも思はれる。感念と感念とが心中で戰つてゐる中に軈て約束の時刻が近づく。私も遂に決心した、「到底も結婚することは出來ん。予が

好いてゐたことには氣が附くまいから、恰度好い。」

起上つて、哀れなハンヘンにはターンルを握らせて(其癖禮も言はなかつたが)、フラウ、ルイゼの家へ往きました。最う日はとつぷり暮れて、薄闇い町家の上に空が僅ばかり夕榮で赤々と見える。ことゝ戸を敲くと、戸は直ぐ開いたから、閾を跨いで、内へ入ると、眞の闇だ。

「此方へ！　お待ちかねですよ」、と皺嗄れた聲がする。

手探で二足ばかり進むと、誰やらの骨ばつた手が私の手を把る。

「貴女はフラウ、ルイゼですか？」

と尋ねると、そのまはかれた聲が、

「はあ、然うですよ。お樂しみさま、へ、へ、へ、」。

老婆に伴れられて、急な梯子段を登つて、三階へ出た。小窓の明で薄闇いけれど、老婆の皺だらけな面は見えたが、齒が拔けて陷落んだやうな口元に、味な厭らしい微笑を湛へて、朦朧した眼をすぼめてゐる。小

さな戸を指して此處だと知らせるから、慄へながらその戸を開けて、入るより早く後を閉切つて了つた。

(十六)

入つた室は狹い間で、大分薄闇かつたから、アーシャが何處に居るか、急には分らなかつたが、熟々視れば、長いショールに纏まつて、窓の側の椅子に腰を掛けて面を反けてゐる。物に怖ぢた小禽のやうに、殆ど隱して居るのかと思はれる程に首を縮めて、息氣を激まして、慄へてゐるそのいぢらしさは、なか〳〵口では云はれません。私が側へ往つたら、益〳〵面を反けて了つた…

「アンナ、ニコラーエヴナ」かく云へば我國にてお美代さんと云ひたるが如く、アーシャといふ時はお美代と呼棄てみいちやんと和げたるが如し此差別は後にも要あれば此に記しおく。」

と云ふと、アーシャは居直つて、私の面を見上げやうとしたが――見上げられない。其手を把つて見たら、冷切つてゐて、死人の手のやうであつた。

「あの私は…」とアーシャはいひかけて嬀然しやうとしてみたが、蒼ざめた唇が命令を聽かない。「私は…どうも言はれない」、と云つて默つて了つた。一言云つては息氣を切らしてゐて見れば、それも道理で。

私はアーシャの側に坐つて、

「アンナ、ニコラーエヴナ。」

と繰返して云ひは云つたが、同じく二の句が續がない。

二人とも默つて了つた。私はアーシャの手を把つたまゝで、その面を視てゐたが、アーシャは尙ほ身を縮めて、苦し氣に呼吸をして、込上げて來る涙を飲込むで、泣くまいとして密に下唇を咬緊めてゐる…その小さく固くなつたところは如何にも哀れで、心細さうである。大方疲れ果てゝ、漸う此椅子まで辿着いて、その儘、それへ倒れかゝつたものでせう。

私は心が蕩然となつた…

「アーシヤ。」

と幽にいふと、アーシヤは徐に私の面を視あげた…あゝ戀する女の眼付といふものは――到底も形容の出來るものでない！　祈るやうな、依頼るやうな、何や彼や聞きたさうな眼付で、身をも心をも投出してゐるやうである……私は其眼に引寄せられて、それに逆らふことは如何しても出來なかつた。微妙の情火が全身に行亘る、血は沸返へる。我を忘れて打俯しになつて、アーシヤの腕に接吻すると……

戰くやうな、斷續の太息が聞こえて、力の拔けた、震へる手先が頭髮に觸ると感じたから、ふつと面を擧げて見ると、アーシヤの面は僅の間に宛で生變つたやうに變つてゐる。恐怖の色は消失せて了つて、眼ざしは恍惚としてゐて、それを見てゐる此方の心迫が引入られさうになる。口を少し開いてゐたが、額は大理石のやうに蒼ざめて、捲髮は風に吹薙

いたやうに後へ垂れてゐる。私は何も彼も忘れて了つて、握つてゐた手を引寄せると、手は素直に引寄せられる、それに隨れて身躰も寄添ふ。ショールは肩を滑落ちて、首はそつと私の胸元へ、炎えるばかりに熱くなつた唇の先へ來る…

「死んでも可いわ…」とアーシヤは云つたが、聞取れるか聞取れぬ程の小聲であつた。

私はあはやアーシヤを抱うとしたが…ふとガギンの事を憶出すと、心がからりと渝はる。「何を爲るッ！」と一喝して、慄上つて後へ居去つて…「令兄は…令兄は何も彼も知つてゐますよ…かうして貴孃に逢ふことも知つてゐますよ。」

アーシヤは落膽して椅子に直つた。

「知つてゐ出でなさる」、と云ひざまに私は起上つて室の隅へ往つて、「令兄は何も彼も御存じた…私は皆話して了はなければならなかつた。」

「話して了はなければ？」とアーシャも微に云つたが、未だ茫然として
ゐて、私が何を言つたのか善くは解らんやうである。
「然です、話して了はなければならなかつたのです」、と私は少し焦れ氣
味になつた、「それといふも貴嬢が宜しくないからだ――貴嬢がさ。何故
令兄に打開けて話して了つたのです？　今日令兄が私の所へ來て、貴嬢
が是々云つたと云つてお話しなすつた。」私は成るたけアーシャの面を見
ぬやうにして室内を歩いてゐました。「最ういけない、駄目だ。」
アーシャは椅子を離れやうとする…
「お待ちなさい」、と私は大聲に云つた。「まあ待つて下さい。私も男だ――
お話することだけはお話して置かなければならぬ。が、然し何で貴嬢は
さう狼狽てたんです？　それも私の心が外れ出したとでもいふのなら、
何だけれど、少しもそんな事は無いぢやありませんか？　それを貴嬢が
打開けて了つたもんだから、今日令兄が入らしつた時、私も隠し切れな

かつたのです。」
「ちよッ、何を云つてゐるんだ！」と心中では自分で自分を叱り飛ばし
た。予は德義も何も知らぬ虚言家だ、ガキンはかうしてアーシャに逢ふ
のを知つてゐるのだ、最う何も彼も爲損じた、露顯して了つた――と頭
の内で鳴り喚く。
「私が兄を喚んだのでは有りませんわ。兄が自分の方から來たのですわ」、
とアーシャがおろ〳〵聲で云ふのが聞える。
「兎に角貴嬢は取返へしのならん事を爲て了つたのだ。而して今さら立
たうと云つて…」
「でも立たなければなりませんものを。今日此家へお出を願つたのも、
お暇乞が爲たいばつかりで」、と矢張小聲で云ふ。
「私は貴嬢と分れるのが如何なに辛いか知れん。それを貴嬢は察してゐ
ないのですか？」

「ですが何故兄にお話を爲すつたの？」とまだ不審がつてゐる。

「だつて話さん譯にいかんぢや有りませんか？それも若し貴嬢が打開けて了はなかつたならば…」

「私は室に籠つてゐたんですけれど…主婦さんの所に合鍵が有らうとは、些とも知らなかつたんですもの…」と卑のない事を云つてゐる。

かうした場合に當人の口から、こんな邪氣ない分疏を聞いた時には、私は殆ど立腹しやうとした…けれども今となつて其言葉を憶出して見ると、涙が漏れる。アーシャは實に哀れな正直な小兒でした！

「兎に角最ういかん！最う駄目だ！最うお分れ申す外仕方がない」、と又愚痴を漏して、密にアーシャの樣子を覗つて見ると…俄にアーシャは面を赧らめた。羞かしくもなれば、怖ろしくもなつたのであらうと、その時その面を見て私は然う思ひました。私とても熱にでも浮かされたやうな鹽梅で、歩いては饒舌つてゐました。「折角情合に風が生つて來たも

のを、貴嬢は押殺して了つたのだ。お分れ申さなければならんやうになつたのも、貴嬢のお蔭だ。貴嬢は私を信じなかつたから不可、疑つたから不可……」

と饒舌つてゐる中に、アーシャは次第々々に俯きだしたが、突然跪いて、兩手を面に加てゝ泣き出した。と見るより私は駈寄つて、抱起さうとしたが、なか〳〵温順に抱起されてはゐない。私はこの女の泣くのを見ると、耐らなくなる、泣かれると、直ぐ動顛して了ふ。

「アンナ、ニコラーエヴナ！　アーシャ！　何卒、お願だ、泣くのだけは休して下さい…」といひながら、手を把つて引起さうとすると…

や、驚くまい事か、アーシャは突然躍上つて、電光の閃く如くに戸口へ駈寄るかと思ふと、最う姿は見えなくなつた…

幾分かを經つて、フラウ、ルイゼが室内へ入つて來た時には、私は未だ室の中央に突立つた儘で、宛然雷にでも撃たれたやうな面をしてゐた。

どうも腑に落ちん。どうして此出逢がかう唐突に馬鹿々々しく終むで了つたことか――而も私は未だ思ふ事の、云はなければならぬ事の百分一をも云はなかつた、未だ自分にも如何なる事か先の認が付かなかつたのであるのに……

「お嬢さんはお歸なすつたんですか？」とフラウ、ルイゼは黄ばむだ眉を額へ釣上げる。

私は馬鹿な面をして其面を見てゐたが――ぷいと室を出て了つた。

(十七)

町を抜けて、直ぐ田圃へ出た。殘念で、物狂ほしくなるほど殘念で、腸を掻毟られるやうである。種々の繰言を言つて、我と我を責むだ。アーシャが出逢の場所を變へたには譯があるのに、それをも悟らず、彼老婆の所へ來るのは何程辛かつたか知れぬのに、それをも察せず、アーシ

ヤの出て行くのを見ながら、それを留めもせなかつたとは――我ながら我心が解らん。あの奥まつた薄闇い室に相對でゐた時は、氣強くなつて、アーシャの縋るのを突退けたばかりか、其罪をさへ數へ立てたが、今はアーシャの面影に追廻されて、心で謝罪をいふ始末である。蒼ざめた面、悸々した濕んだ眼、傾けた首筋に亂れかゝつた髪の毛、胸に密と觸る頭――あゝ憶出せば胸は沸返へる。「死んでも可いわ……」と幽に云つた其聲が、未だ耳元に聞こえる。「けれども予は真心通り做つたのだ」、と我と我を慰る其側から、「何の真心通の事があらう！　予は果してあゝしてアーシャと分れやうと思つてゐたのか？　果して分れ得ると思ふか？　いやさ、アーシャを手放し得るかといふに？　馬鹿め！　白痴め！」と憤然として嘆いた。

その中に夜に入つたから、兎も角も足疾にアーシャの宿へ往てみました。

(十八)

ガギンは出迎に出て來て、まだ遠方から、

「妹にお逢ひでしたか？」

「最うお歸りなすつたでせう？」

「いゝえ。」

「まだお歸りなさらんのですか？」

「まだ歸りません。私は、濟まん事だつたが、何分我慢がきれんで、お約束には違ふが、禮拜堂まで往つて見ました。ところが彼處にはどうも居ないやうでしたが、參らなかつたのですか？」

「彼處へはお出でなさらなかつた。」

「ではお逢ひなさらなかつたのですか？」

お目に懸つたと、サどうも言はない譯にいかなかつた。

「何處でね？」

「フラウ、ルイゼの所で。一時間ばかり前に、お分れ申したのです。最うお歸りなすつた事と思つてゐました。」

「では其内に歸るでせう。」

家内へ入つて、椅子を駢べて坐りは坐つたが、二人とも默つてゐる。雙方とも甚だ極が悪い。間なく振返つては戸口を眺めて、聞耳ばかり立てゝ居たが、その中にガギンは突と起上つて、

「如何したんだらう？　氣が氣ぢやない。眞個に弱らせて了ふ。探しに出て見ませうか？」

連立つて戸外へ出て見れば、日は最うとつぷり暮れてゐる。

「如何いふ談話を爲すつたんです？」とガギンは帽子を目深にかぶり直す。

「お目に懸つたのは五分ばかりの間だつたが、かねて申合せた通りのお

談話を爲たんです。」

「かう爲ませう。別々に捜して見ませう。その方が早く見附かるかも知れん。而して兎に角一時間經つたら、また此處へ入らしつて下さい。」

(十九)

がヤンに分れて、足疾に葡萄圃を下りて、町へ飛んで行つて、急々と辻々を經巡つて、殘る方なく尋ねて、フラウ、ルイゼの家の窓をまで覗いて見て、それから又ライン へ引返して來て、岸傳に駈出した…　をり

婦人の姿を見掛けるが、アーシアは何處にも居ない。最うかうなると、殘念はさて措いて、内々心配で耐らん…いや心配ばかりなら可いが、後悔もすれば、悲しくもなる、戀しくもなる――それも普通の戀しさではない。憂ひ悶えて、闇の中を彷徨ながら、初は小聲が次第に大聲になつて、アーシヤの名を呼んでみた。彼を愛するといふことを幾回となく

繰返へして、未來永劫離れまいと誓ひた。最一度あの冷たい手を握りたい、あの細い聲を聞きたい、あの姿を面りに見たい、若しそれが叶つたら、死んでも憾はないとまで思つた…　アーシヤは殆ど手に入つたのである。斷と心に決する所があつて、露ほども僞氣のない眞心を傾けて、此私に靡かうとしたのである。まだ誰の手にも觸れぬ、謂はゞ、春華のやうなものが、その咲初めたばかりの所を、此私に摘ませんとしたのである…　それを私はじつと抱緊めることをもせず、彼可愛らしい面の雲を霽らして、染々と嬉しがる風情を見やうと思へば見られたものを…あゝ情ない事をしたと思へば、殆ど狂せんとするばかりになる。

幾ら惋いても詮のないので、悲しくなつて、「何處へ往つたんだらう、如何したんだらう？」と云つてゐると…何やら白い物が河岸に瞥と見えた。其所は私の善く知つてゐる所で、七十年許前に水死した者があつたのを葬つて、その標に古風な文字を刻むだ石の十字架を建てたのが、半

は地中に埋れてゐる所です。私は胸が冷りとした…　十字架の在る處まで走り着くと、白い物は何處ともなく消え失せて了ふ。アーシャと云つて、我ながら我聲の懐いのに驚いた――けれども誰も何とも應じない。

若しやガギンが捜宛てゝはゐないかと思つて、一先引返へしてみることにきました。

（二十）

倉皇と葡萄園の徑を上ると、アーシャの室には燈火が點いてゐる…それを見て私は少し安心した。

住居近く來て見ると、樓下の戸は閉切つてあつたから、敲いてみました。すると側の眞闇な室の窓が開いて、ガギンが面を出した。

「見附りましたか？」

と尋ねると、小聲で、

「歸つて來ました。今室で衣服を着改へてゐる所で。先づ何事も無いやうです。」

「それは好かつた！」と餘りの嬉しさについ大聲に云つて、「それは好かつた！　先づ是で安心した。けれども未だ篤とお談をせんければならんが…」

「他日の事に願ひませう」、と云つて、ガギンは密と窓の戸を引寄せて、

「他日の事に。今晩は是で御免を蒙むらう。」

「では明日また。明日は全然御相談を決めませう。」

「左樣なら。」

窓は閉つて了つた。

私はアーシャと結婚したく思ふことを今茲でガギンに云つて了はうかと思つたから、あはや窓を敲かうとした。けれどもこんな時にそんな事を…えい明日まで待て、と思案を爲かへて、明日は予も幸福兒になるん

た……

「ヘッ、明日は予も幸福兒になるんだ！　幸福といふものには、明日だの昨日だのといふことの有るべき筈はない。持越した幸福といふものも頓と無いことなれば、取越した幸福といふことも、ついぞ聞かんことだ。若し幸福なら、現在が幸福なので――それも一日間ど續く譚ではなく、幸福だと思つた其瞬間が幸福なのである。

如何して宿へ歸つて來たのか、覺えがない。歩いて來たのでもなく、舟に乘つて來たのでもなく、何か魔物のえらい力の有る翼に煽られて來たやうな心地がする。灌木の生茂つた傍を通ると、鶯が啼いてゐたから、立止つて久らく聽惚れてゐたが、鶯までが吾の戀や果報を歌に謠つてゐるらしく思はれた。

（二十一）

翌朝例の家近く來て見ると、不思議な事もあればあるもので、入口の戸は云ふ迄もなく、窓といふ窓が悉く開放しになつてゐて、闕外には何か紙屑が散つてゐる。戸の蔭には帚を持つた婢が見える。

私の近づくのを見ると、未だがキンは居るかとも云はぬ中に、婢が頓狂な聲で、

「もうお發足になりましたよ。」

「えッ、お發足になつた？　如何して？　何處へ？」

「今朝ほど、六時で御座いましたか、何處へとも仰しやらずにお發足になりました。ちよいと、あの旦那は某樣と仰しやりはなさいませんか？」

「然うだ。その某だ。」

「そんなら確か旦那への置手紙が主婦さんの許にある筈です」、と二階へ上つて行つたが、軈て手紙を持つて降りて來て、「是で御座います。」

「そんな筈はないが……如何したといふのだらう？……」

婢は怪訝な面をして吾の面を見てゐたが、又掃除にかゝつた。

封を切つて見れば、かギノの手紙ばかりで、アーシアは一筆も殘さない。かギノの手紙には先づ突然に發つ無禮の謝罪から書起して、然しながら私にしても、熟く考へたら、彼の仕打を悪いとは思ふまい。此儘にして捨置いたなら、遂に進退谷まつて、如何いふ事にならうも知れん。それを然うならせまいとすれば、他に策も無からうと思ふ、などいふ事が書いてあつて、それからこんな文句もあつた。

『昨夕兄とアーシヤの歸るを待ち居候際生は別離の已み難をつく〳〵と感じ申候世には偏見ながら一概に擯斥すべからざる意見も可有之存じ候へば兄が愚妹と結婚を憚り給ふこと強ち御無理とは存じ不申候何事も總て愚妹より聞取り申候彼も今は此地を去らんの望愈々切となりて頻に生を掻口説き候故聊か彼の心遣りともならばとて生も遂に其望に任せ申候』

末には折角の友をかう瞬時にして失ふのを本意なく思ふ事、影ながら私の幸福を祈る事、別に臨むで親友として握手する事などがつど〳〵書いてあつて、さて何卒吾々を捜して呉れるな、としてある。

「偏見とは何だ？」と私は宛らガギンが傍にでも居るやうに喚いた。「人を馬鹿にしてゐる！それに誰が許してアーシヤを奪つて行つたのだ？……ちッ……」と云つて、我と我頭にむしやぶりついた……

婢が大聲を立てゝ、主婦を呼立てる、その聲が耳に入つて、漸く我に反つたが、さてかうなると、彼等二人のものを尋ね出さう、草を分けても尋ね出さうの念が炎え上る。こんな目を見ながら、此儘に泣寝入にしては濟まされん。主婦に聞けば、朝の六時に漁船に乘込んでラインを下つたといふ。事務所へ往つて聞けば、キヨルン迄の切符を買つたと云ふ。そこで直ぐ荷物を取纒めて跡を追はうと思ひながら、宿へ歸るとてフラウ、ルイゼの家の前を通ると……ふと誰やら私を呼ぶ者がある。仰向いて

見れば、昨日アーシャに逢つた彼の室の窓から、例の老婆が厭らしい笑顔を出して私を呼んでゐる。素知らぬ面をして行過ぎやうとすると、何か預り物が有ると云つて呼ぶので、あぶ〳〵其家へ入りは入つたが、また其室を見た時の私の心持は如何なでしたらう！……

老婆は小さな書付を出して、

「本當は貴君の方からお過なすつたんでなければ、呈げるんぢやないんですけれど、貴君が餘り御樣子が好いから、呈げませう。」

受取つて見ると、小さな紙片に鉛筆で走書にかうしてあつた。

『最早かされては御目もじえ叶ふまじと存候まゝお暇乞までに一筆書き殘し候。此度俄に出立いたし候はさら〳〵口惜しき故にてはなく唯詮方なきまゝにござ候昨日はづかしくも取亂したる樣を御目に懸け候をり只の一言仰せ下され候へば私とても心强くは歸宅せざりしをと存候へどそのをり何の仰せもなかりしは是非もなき御事に候されどその方

反てお互さまの身のためかも知れず候今は永のお別に候かしこ』

只の一言…あゝ私は痴漢である！　此一言を昨日泪ながらに、人氣のない野原で、何の効もなく言ひ散したが…アーシャには其一言を聞かさなかつた。私は彼を愛するといふことを云はずに了つた…彼時は實以て言得なかつたのである。彼一期の浮沈の定らうといふ室でアーシャに逢つた時は、まだアーシャを慕つて居るとは思はなかつた。ガヤと相對で、極りの惡い想をしながら、まじり〳〵してゐた時も、未だ然うとは思はなかつた…　確に然うと思つたのは、それから少し經つて、非常に氣遣はしくなつて、アーシャの名を呼んで尋ね廻つた時で、其時始て戀しいが心を衝いて沸上つて、抑へたいにも抑へ切れなかつた…が、既う晩かつた。そんな筈はないと云ふ人も有るかも知れぬが、有るか無いかはさて措いて、實際どうも然うであつたに違ひない。若しアーシャに露ほども浮いた心があつて、身分も通常であつたならば、發ちはしなかつ

たらうが、餘の者なら忍び得る事でも、彼の身では忍び得なかつたのである。そこに私は心附かなかつた。薄闇い窓の下で最後にガギンに逢つた時、日まで出懸つた言葉はあつても、碌でもない考に搦られて、未だ取留めやうと思へば取留められた線をも、遂に取外して了ひました。

其日の中に荷拵をして、再び某町へ來て、キヨルンへ出立しました。忘れもしない、渠船が岸を離れやうとする時、一生忘れまじき此町や此界隈に心中で名殘を惜しむでゐると——ふとハンヘンの姿が目に入りました。未だ色光澤は好くなかつたが、愁氣は無くなつて、河岸の床几に腰を掛けてゐる、その傍にはなか〳〵男前の好い若い男が立つてゐて、笑ひながら何か談話をしてゐました。對ふ岸にはマドンナの像が小さくなつて、相變らず綦越しに、悲しさうな面を出してゐました。

(二十二)

キヨルンで少し手懸を得て、兄妹の者はロンドンへ往つた事が判つたから、直樣跡を追蒐けて見たが、何程手を盡くして尋ねて見ても一向判らなかつた。それより久しい間私は諦めることが出來ずして、尙ほ强情に尋ねて見たが、結局は尋ね出さうの望を絶たなければならなかつた。

といふので私は再び二人の者に邂逅ふことが出來なかつた——アーシヤに逢へませんでした。ガギンの噂は仄に聞いたことも有つたが、アーシヤの行衛は遂に判らずに終ひました。それより數年後の事であるが、或年外國へ往つた時、汽車の中で忘られぬアーシヤの面相に其儘といふ婦人を皆と見掛けたことが有つたが……恐らくは他人の空似に欺されたのでせう。私の記えてゐるアーシヤは若い頃見たまゝの娘で、低い木造の椅子の脊に倚懸つた姿を見たのが見納であつたが、其時の娘です。

然しながら、實際を云へば、アーシヤを失つたからとて、私はさほど永くも懲いではゐなかつた、のみならず、アーシヤと一所にならなかつ

たのは寧ろ好かつた、あんな女を妻に持つては恐らく幸福ではあるまいと思つて、自ら慰めたほどである。私は其頃は未だ若かつたので、未來といふものは過去つて見れば早い短いものであるが、それを際限もなく永いものゝやうに想つてゐた。何の、こんな事は未だ幾らもある事だ、また〳〵之よりも嬉しい面白い事もあらう…と思つてゐた。其後婦人とも多く交際して見たが、アーシャに逢つた時のやうに、心も蕩然となつて、深く思焦れたことはない。なか〳〵以て！　誰がどんな眼をして見ても、アーシャが情を籠めて見るやうなことはない。誰に取縋られても、此方の心もそれに感じて染々嬉しいと思つたことはない。妻も子もなく家をも成さずに、一生獨居と運が定つて、私は今淋しい月日を送つてゐるが、アーシャの手紙と、それから今は乾びて了つたが、昔アーシャが投げて呉れた風呂草の花とは今だに重寶のやうにして藏つてある。花はまだ微に殘香を留めてゐるけれど、それを投げて呉れた人の、後にも前

にも僅た一度私の唇に觸れた手は、今頃は最う疾くに土に歸つてゐるかも知れん…私とても――今は老込んだ。昔の我も、面白く心の噪いで娛しかつた歳月も、止所もなく狂つた希望も意氣も――今は皆痕迹も無くなつて了つた。之を思へば、果敢ない草花の幽かな香でも、人の喜愛よりは永く保ものので――だから人よりも壽命の長いものです。

片戀

終

奇遇

Passa que' colli e vieni allegramente,
Non ti curar di tanta compania——
Vieni, pensando a me segretamente——
Ch'io t'accompagna per tutta la via.

（歌の意は、岡を越えて來ませ、いそ〳〵と來ませ、強ひて多くの連をば求め給ふな、君一人にて來ますとも、道々妾の上を懷ひ給はゞ、妾を伴ひ給へ、ろに同下からむとなり。）

（一）

自分の持村から五里ばかりの處にグリンノエといふ村が有つたが、夏の中は屢く此村へ遊獵に往つた。其村の界隈には野禽類では恐らく郡中第一であらうといふ場所が幾らもある。最寄の灌木の間や野面などを獵して、いつも日暮に此邊では珍らしいものにしてある、村近くの沼へ

寄つて、其所から直ぐに旅宿に歸ることにしてゐたが、旅宿はいつも取りつけで、亭主は村の頭百姓をしてゐる信切な男である。沼からグリンノエまでは半里計もあらうか、總て中凹の道だが、唯中ごろで小さな丘を一つ踰さなければならぬ。此丘の上に一構の邸、といつた所が、住棄てた母屋一棟と園の外何もないが、邸がある。その側を通るのは大抵夕榮の燠の頃であつたが、今でも憶出す、いつも此家の窓をぴつたり釘附にした所は盲目の老人が日向ぼこりでもしてゐるやうに見える。老人さも信切さうな面をして路傍に蹲踞むでゐる、此人のためには日の光が常闇に代つてから最う久しくなるが、流石に未だぐいと擡げた面と曖かさうな類とだけには日光を受けてゐる。母屋には久しく人の住まはぬ樣子であつたが、邸内の小さな孫屋には猫脊で、背の高い、白頭の、活々としてゐたけれど、沈著いた面相の、年老つた新平民解放の奴隷也たるが住つてゐる。いつも孫屋の孤窓の下の造附の椅子に腰を掛けて、鬱々とし

て物思はし氣に遠方を眺めてゐたが、自分を見掛けると少し起上つて辭儀をする、それも親どころでない、祖父時代の老僕に限つて爲るといふ例の落著いた、勿躰らしい辭儀振で。度々話しかけてみたが、老人話好ではなかつた。唯その住まつてゐる邸の持主は老人の舊主には孫女に當る後家で、それには妹が一人あるが、二人とも市でなければ外國へばかり出てゐて、とんと本宅へ歸つて來ぬといふ事だけは聞いたことがある。老人自身も此ねえに長生のを爲ちよれば、時よりは吁つまんねえ事だと思ふことも有りますけえ。えら長生のを爲ましたア」から、そこで早く此世を去りたいと云つてゐる。此老人はルキヤーヌイチといふもので。

一日自分が如何かして野面で暇取つた事があつた。野禽も隨分居たのに、それに朝から靜かで、狹霧が立籠めて、何處も彼處も夕闇の瀰蔓たやうな、獵には恰好いといふ天氣であつた。遠方まで彷徨つて、例の邸まで來たころは、最う日はとつぷり暮れて、月まで出て、空は疾くに夜

景色になつてゐた。園に沿いて歩いてゐたが、四邊は閑としたものである…

廣い往來を横に截れて、塵塗けの蕁麻の中を密と通つて、低い垣に寄添つて見ると、目の前に小さな園が銀色の月光に隈なく照されて、宛然濕つたやうになつて、何やら佳い香が紛々として、露に濡れてゐたが、園の作樣は昔風で、細長い芝生一區で出來てゐる。眞直な徑が四方から來て、中央で集合て、蝦夷菊の生茂つた圓い形の栽込となつてゐて、周圍は高い菩提樹が並び善く綠を取つてゐる。僅た一箇所其綠の二間ばかり缺けてゐる所があつて、その間隙から低い棟の家が僅か見透されたが、不思議な事も有れば有るもので、今夜は窓二ッとも燈火が射してゐる。芝生には處々林檎の樹が植えてあつて、その疎らな枝越しに穏かな夜の蒼空も見えれば、月の恍した光も漏れて、樹の根方には其影が白ばい草を薄く斑に染めてゐる。園の一方には菩提樹が蕭々と青光に光る月の光

を受けて薄青く見え、今一方には透しても何も見えぬほどに黑々と立駢んでゐたが、折々怪し氣な籠つた音が、茂合つた葉の中にさら〳〵と聞える所は、宛然木立が其下で消えて了ふ徑の森とした木下闇へ人を誘込まうとするやうである。星は空一面に覆れて、柔しい蒼い光をちら〳〵と落して、靜に遠く下界を瞰下してゐる。片々の淡雲が時々月に懸つて、穏かな光を少しの間朦朧とした、底に明味のある暗霧に變て了ふ…四圍の物が總て恍惚として、生暖かな、佳い香のする空氣さへ靜まり返つてゐて、唯をり〳〵小枝が落ちて漣の起つやうにゆら〳〵とする…　何か待焦れてゐるやうな、草臥れたやうな氣味である…　垣の内を覗いて見ると、つい鼻の頭に眞紅な野罌粟の莖が草叢の中からすつと出てゐて、そのぱつと咲いた花の底には大粒の圓い夜露が薄光りに光つてゐる。何も彼も恍惚としてたらけて、宛然延上つて、身動をもせずに、何をか待ちながら、空を向上げてゐるやうである…　此生暖な夜に眠入もせず

何を待つてゐるのであらう？

物音を待つてゐるのである。靜まり返つて耳を澄まして生物の聲のするのを待つてゐるのである――けれども、どそとも云はない。鶯は疾くに啼罷むで了つた…と云つて、蛩びすがる虻のふつと唸る聲、園の盡頭の菩提樹の向ふの養魚桶の中で小さな魚のぴちや〳〵と跳る音、一駭いて眼を覺ました小禽の眠むさうな啼聲、野中に遠く、人やら、獸やら、鳥やら、何が叫ぶとも聞分けられぬ程に遠く聞える叫聲、往來の方にする刻むやうな急足の音、などいふ鈍い音や幽かな響は唯寂寞を增すばかりである…　幸福を待つのでもなく、憶出したのでもなく、何とも口には言はれぬ心地に萎されて、身動きをもせずに、この月に照され、露に濡れて、寂寞としてゐる園の前に佇、立むだまゝ、黯淡い中にうす赤く見える三ッの窓を、如何いふ積りか、傍眼も觸らず諦視めてゐると、ふと家の内で鳴物の調子を諧せる音がした――音がして、涙のやうにうねりを

打つて響き渡ると…空氣は焦心て響き反べす…　自分は我知らず慓然とした。

鳴物の音に續いて女の聲で歌を唱ひだした。一心に聽入ると…や、驚くまい事か…二年前に伊太利のメルレントで此歌も此聲も聞いた事がある…　それ〳〵…

Vieni pensando a me segretamente….

あれだ〳〵、あれに違ひない…　如何して聞いたかと云へば、まァかうである。或時海邊で久らく散歩してから、宿へ歸らうといふので、町を急足に通つて來たことが有つた。其時は日が暮れてから最う餘程經つてゐたが、南國の事であるから、華やかなもので、露西亞の夜のやうに寂然として悲しくなるのとは譯が違ふ。なか〳〵そんなものでない！人で云つたら、先づ若い果報な女といふ所で、鮮かで、綺羅びやかで、美しいものだ。月はおそろしく皎かで、煌々する大粒な星が靑黑い空に

紛々と覆れて、黄ばむ程月に照された地面に物の影が黒々と際立つて見える。町の兩側には家々の園の石垣が建列ねてあつて、蜜柑の樹の曲りくねつた枝などが出てゐたが、金の毯見たやうな、重さうな實が葉隠れに見えたり、華やかに月に差出て、鮮に赤らむだりしてゐる。樹は大抵花を持つて、柔しく白むでゐて、空氣は飽まで強い、鼻を貫くやうな、殆ど氣の重くなる程の、何とも云へぬ佳い香がする。けれども、かうした美景も疾くに眼慣れて了つてゐたから、自分は唯一刻も早く旅宿へ歸らうと思つて、さつさと歩つて來ると、側の石垣の上の小さな觀樓の中で、ふと女の聲がした。何やら聞慣れぬ歌を唱つてゐるのて有つたが、その聲が歌の文句に見えた、待つ身の切な嬉しい想を籠めて、さも懐かしさうで有つたので、思はず立止つて、ふつと仰向いて見ると、觀樓には窓が二ッあつたが、二ッとも透戸(ヴェルーシー)が卸してあつて、その狭い隙間から、ぼんやり薄明が射してゐる。Vieni, vieni と繰返して歌が

罷むと、敷物の上へ滑落ちた六絃琴のかと思はれる絲の音が幽かに聞えて、衣服の音がさら〳〵として、床が纔か軋む。片々の窓を漏れる火影が消える…誰やら窓の所へ來て身を寄せたらしい。思はず二足ばかり後へ退却ると、不意に透戸がごとりと云つて、ぱつと開いて、白い衣服を着た仇な姿の女が美しい面を衝と出て、手を延しながら、Dei, tu? 耶君？ といふ。何んと答へて好いか判らぬので、狼狽してゐる中に、女もおやッと云つて、身を後方へ引いたかと思ふと、透戸がぱつたり閉つて、觀樓の中が一層暗くなつた。大方燭火を次の間へ持出したものであらう。自分は身動きもせず佇立むだ儘で、久らくは正氣が附かなかつた。ふいと出た女の面はおそろしく美しかつた。ちらと見たばかりだから、面相の細かい所まで視て置く暇は無かつたが、瞥と見たばかりでも、深く強く心に浸みて…その時既に一生忘れられまいと思つた程である。觀樓の壁へも、女が首を出した窓へも、月がまともに射してゐたが、其光の中

に大きい黒眼勝の眼が美しく光つて、解しかけた黒髪が少し搔げた圓い肩へ涙の曲つたやうになつて、ふつさりと垂れてゐて、ちなやかに屈むた所に優しみも有れば、耻かしさも籠つてゐて、早口ながら善く徹る小聲で聲を掛けた、その聲がさも懐かしさうで、――おそろしく好かつた。隨分永い間一ッ處に立止つたまゝでゐたが、軈て少し傍へ寄つて、向側の垣の影へ入つて、其所から、未だ何事か有りさうに思つて、鈍な怪訝な面をして觀樓を眺めて、聞耳を立てゝゐる。注意を張詰めて聞耳を立てゝゐると：薄闇くなつた窓の彼方で、誰かの靜かな息氣遣が聞えるやうな時もあれば、さら〳〵と物音がして忍びやかに笑ふ聲のする時もある。彼此する中に、遠方に人の足音がして：段々近寄る。只見れば、自分と殆ど同じ程の背格好の男が町盡頭に顯はれて、全然氣が付かなかつたが、觀樓の側に耳門があつた、その耳門まで急足に來て、卒然その鐵輪を二度程突鳴らして、待つてゐながら、小聲で "Ecco ridente" と唱ひ出

すと、耳門が開く：男はすつと門内へ入つて了つた。自分は身震をして、首を振つて、手を啓げて、手荒く帽子を突きのめらして、膨れながら宿へ歸つて來たが、その翌日は日盛に二時間ばかり觀樓の前を往きつ戻りつ無駄足を踏むで、其晩タッソーの宅をも見物せずに、メルレントを立つて了つた。

といふ譯であるから、矢張同じ聲で同じ歌を唱ふのを、こんな邊鄙な露西亞の片田舍で聞いた時の自分の驚は如何なで有つたらう！　あの時のやうに、今も夜で、燈火の射す餘所の小座敷で不意に歌を唱ふ聲がしたので、その上自分も一人きりである。胸が頻に躍り出す。「夢ぢやないか？」と異むだ。すると又最後の Vieni が聞える：：窓が開くであらうか、女が面を出すであらうか、と思つて見てゐると、窓も開けば、女も面を出した。間が五十歩も隔たつて、淡雲が月に懸つてゐたけれど、直ぐにそれと知れた。あれ〳〵、メルレントで見懸けたあの女に違ひない。

今夜はあの時のやうに素肌の腕を延しはさなかつたが、その代り徐と其を組合せて、窓に持せて、默然として身動をもせずに、何處ともなく園の中を眺め出した。如何にも彼女だ。忘れられぬ面相も、類の無い眼付も其儘である。今夜も濶大した白い衣服を着てゐるが、メルレントで見たよりは幾らか肉付いたやうで。其樣子を見ると、安心してほつと一息してゐるらしくて、時を得顏に美に誇つてゐながら、念が屆いて滿足したといふ氣味が何處かにある。女は耳、久らくの間身動をも爲ずにゐたが、纏て室の内を顧つて、不意に起直つて、徹る聲で高く "Addio!" と左樣ならと三ん度呼ぶと、その美音が遙か遠方まで響びき渡つて、朔まつて絶えゝになりながら、苦提樹の上や、背後の野中や、處々方々で久らくどよみを作つてゐたが、其間四邊の物が總て此聲に涵されて、反響を鳴らして――女の氣が充滿としてゐるやうな鹽梅であつた。さて窓が閉る、家内の燈火は程なく消えて了ッた。

――はつと我に復へるや否や――尤も餘程間を置いての事であつたが――我に復るや否や、直に園に沿いて母屋の方へ往つて、閉切つた門まで來て、垣越に覗いて見たが、内の樣子に何も變つた事はない。唯片隅の庇の下に馬車か一輛引込んでゐつて、その前半部の、乾いてはゐたが、泥だらけに爲つた奴が、月に白むで際立つて見えるばかりで。住居の窓は此前見た通り戸締がしてある。つい言遣れてゐたが、此一週間ばかりと云ふもの此村へは寄らなかつたので。不審に思ひながら、三十分餘も垣外を彷徨いてゐたので、遂に年老つた飼犬が目を注け出したが、それでも吠えはせずに、唯ちよぼ〳〵した眼を細くして、おそろしく意味ありさうに、闘の所から覗いてゐる。自分も其意が悟めたから、其處を去つて、三四町來ると、ふと背後の方で蹄の音がする……程なく一人の男が驅馬に乘つて、大駈を追つて來て、自分の傍を乘切る時、急に此方を振向いて、目深く戴つた帽子の下から驚のやうな鼻と立派な髭とを瞥と見せ

て、其儘、往來を右へ折れて、直ぐ森に隱れて了つた。「あ、彼男だ」、と思ふと、何だかこそばゆいやうな氣がした。彼男だと思つたも僻目ではあるまい、どうも其風體がメルレントで圓の耳門を入る所を見かけた彼男の風體に酷肖である。半時も經つた頃には、既うグリンノエの旅宿に歸つてゐて、亭主を覺して、直ぐ隣の邸へ來た者はあれは何者だと尋問をはじめると、亭主は辛うじて女地主が來たのだと答へる。

「だがさ、如何な女地主が？」と急込んで問く。

「どんねえッて――貴婦人達でがんさ」、と甚だ氣の無さゝうに答へる。

「だがさ、如何な貴婦人達だと云へば？」

「どんねえッて、世間並の貴婦人達でがんさ。」

「露西亞の人か？」

「でなきや何處んもんだあね？　知れた事だ、露西亞の人でがんさ。」

「外國人ぢやないか？」

「はあ？」

「來てから最う餘程になるか？」

「知れた事だ、此中でがんさ。」

「永く居る積だらうか？」

「どうでがんすかね。」

「金滿家だらうか？」

「どうでがんすかね。金滿家かも知んねえ。」

「誰か紳士風の人が一所に來はしなかつたか？」

「紳士風の人が？」

「さうさ、紳士風の人が。」

頭百姓は溜息を吐いた。

「やれ〳〵睡むたい事だ」、と欠びを爲て、「う…うんにや…御座らつしやらねえやうでがんすよ」、と云つたが、突然、「知りましねえ。」

「まだ近所にはどんな人か住まつてゐる？」
「どんねえな？　どんねえつて――いろんな人が。」
「いろんな人！　何といふだらう、名は？」
「誰があね、女地主樣かあね？　近所の地主樣達かあね？」
「女地主さ。」
頭百姓はまた溜息を吐いた。
「名は何ちふかと聞かつしやるだあね？」と口の中で云つて、「何ちふか知りましねえ。姉子樣の方は確かアンナ、フヨードロヴナといひましつけえ。妹子樣の方は…うんにや、知りましねえ。」
「では姓なりとも、賣めて。」
「姓？」
「さうさ、姓さ――名字さ。」
「名字……　さやうさね。ほんに知りましねえ。」

「二人とも未だ若いか？」
「うんにや。若え事あがんせんよ。」
「では何歳位？」
「さやうさね、妹子樣の方はもう四十餘だつべえ。」
「虛言を吐け！」
頭百姓は口を噤むだ。
「さうかね――そんだらお前樣の方が能く御存じだあ。私い知りましねえ。」
「ちよッ、一つ事ばかり云ふ！」と憤々として罵しつた。
露西亞人がかういふ返答を爲出しては迚も碌な事を聞出せる氣遣のないことは經驗で承知してゐたから（それに亭主は今臥床へ入らうとしてゐた所で、返答をさやうとしては、こくり〳〵辭儀をして、邪氣なく吃驚して眼を睜つて、心地よく潮して來る睡氣に粘着いた唇を辛うして引

放してゐたので）――自分は斷念めて、夜食もせずに小舍へ歸つて了つた。

が、なか〳〵眠付かれない。「何者だらう？」と不斷に不審がつてゐた。「露西亞人だらうか？露西亞人にしては、伊太利語を用ふのが可異い……亭主め若くはないなぞと云ひくさる……虚言を云つてらァ……が、何者だらう男は？……全然解らんな……それにしても餘程奇遇だわい！　どうしてかう二度も續けて……が、待てよ、何者で何故此處へ來たのか、如何かして嗅出してやらう……」といふやうな零碎なまど氣ない事を思つて胸を騷がして、夜更けてから漸う眠入つたが、奇怪な夢を見た……

何でも日盛に何處かの荒野を彷徨つてゐるやうである――と見れば、眼の前の焦げるやうな黄ばむだ砂の上を大きな物の影がすつと通る……仰向いて見ると――例の美人が長い白い翼を負つて、白々とした風をして、空中を飛んで行きながら、自分を麾ぐ。跡を追つて駈出しては見たが、

先は身輕くふは〳〵と飛んで行くのに、此方は地を離れて昇ることが出來ないから、唯空しくあこがれて手を延すのみである。美人は向ふへ飛んで行きながら「Addio!　如何して貴君には翼がないの……Addio!」といふ。すると四方からAddioと響き返へす。砂粒の黄い聲でAddioと叫ぶのがきい〳〵聞える……その又〳〵といふ音が耳の聾るほど鋭く響く……自分はそれを蚊か何かを拂退けるやうな手附をして拂退けて――きよろ〳〵眼で美人を搜すと……美人は最う雲の形に變つて了つて太陽を目がけて騰つて行く。太陽は戰きつ搖ぎつ笑ひつして迎へのために黄金の長い絲を手繰出すと、見る〳〵絲は女を絡むで、女はその中に鎖けて了ふ。自分は狂氣の如くになつて、聲を限に喚いた。「あれは太陽ぢやない、太陽ぢや、あれは伊太利の蜘蛛だ。誰に露西亞行の旅行券を貰つて來たのだ？今に尻を割つてやるぞ。余は彼奴が餘所の國で蜜柑を竊む所をちやんと見て置いたからな……」然うかと思ふと、また狹い熊逕を行くやうな心地

がする…いそ〳〵として行く。何處へか一刻も早く行着かなければならぬ、何か前代未聞の幸福な事が先に待つてゐるのである。すると、おそろしく大きな岩が鼻の先にむつくり嵎起る。右へうろ〳〵左へうろ〳〵して脱路を索すけれど――脱路はない！　それッ、岩の向で Passa, passa quei colli…といふ聲がする。自分を呼ぶのだ、その聲が、さも悲しさうに繰返して呼んでゐるのだ。憂ひ悶えて駈廻つて、どんなに狹い割目でもと索すけれど…悲しい哉！何方を向いても直立の壁だ…Passa quei colli とまた哀れな聲がする。泣出したくなつて、滑かな石へ身を打着けて、狂氣の如くになつて、それを引掻くと…ふいに眞闇な脱路が目の前に開く…氣の遠くなるほど嬉しく思つて、駈出すと…「無益な事だ！何に通らせるもんだ…」と誰やら喚く。只見れば、ルキャーヌイチが行先に立はだかつて、拳を揮つて可怖しい權幕でゐる…鼻藥を宛がはうと思つて、急いで隠袋を探つてみたが、何もない…「これさルキャーヌ

イチ、通して呉れよ、禮は後でする」、といふと、「あいや、疎忽めさるな、セニヨール（此に貴殿さいふが如し西班牙語なり）」、と云つてルキャーヌイチが妙な相好になる。「拙者は奴僕では御座らぬ。人も知つたる武術の修業者、ラマンチャのドン、キホートにて候ふぞ。某生涯ヅリチーニヤを索ね巡りたれども、遂に邂逅ふこと能はず、されば他人の戀人を尋出すを阿容と指を嘲へて觀て居られうや？」Passa quei colli…といふのがまた聞えたが、此度は殆ど泣出しさうな聲である。「お通しなさい、セニヨール！」と自分は憤然となつて喚立つて、あはや飛蒐らうとすると…猛者の提げてゐた長柄の戟でぐさと刺られて、息氣も絶え〳〵になつて仰向けに其處へ倒れた…動くこともならぬ…すると、例のがランプを持つて入つて來て、それを頭より高く品よく差擧げて、そしてそろ〳〵と自分の傍へ來て、屈むで視て、「此奴だよ、此剽輕者だよ！」と云つて、冷笑をする。「此奴だよ、私の身の上を探らうとしたのは。」すると、その持つてゐたランプの燕油

が恰ど自分の痰を貫つた胸へたら〳〵と滴る…　プシヘーヤ神様の！と辛うじて聲を揚げると、眠が覺めた…

眠苦しく一夜を明して、拂曉前には最う床を出て了つた。それから手ばしこく狩裝束をして、直ぐと邸へ往つて見た。餘り急込みやうが甚かつたので、例の門まで來ると、漸う東方が白みだした。處々に雲雀の聲がして、燕鳥も樺の村立の中で啼いてゐたが、家の内はまだ誰も起きぬと見えて閑寂としてゐる。待ちかねて氣を焦ちながら、露深い草を踏しだいて彷徨して、棟の低い見すぼらしい住居を間なく見やつては、此内に例の化生の者が居るのだなと思つてゐると…ふいに耳門が微に軋むて、開いて、縞の「ガザーク」外套を着たルキヤーヌイチが闕の所へぬつと現はれた。遂々とした頭で、ぬつと面を出した所を見れば、平生よりも餘程氣難かしさうである。自分の姿を見て驚いた風で、再び耳門を閉めさうにしたから、

「老爺々々！」と狼狽て聲を掛けた。

「何用が御座らつしやるだあね、朝ばらから？」

と云つたが、籠つた、落着いた調子である。

「何ださうだね、御主人が歸つてお出でなすつたさうだね？」

ルキヤーヌイチは默然としてゐたが、軈て、

「歸つて御座らつさやりました。」

「お一人でか？」

「妹子さまと。」

「昨日お客は無かつたか？」

「有りましなんだ。」

と耳門の戸を引寄せる。

「ちよいと、老爺…待つて呉れ…」

ルキヤーヌイチは咳をして寒さに縮み上つた。

「まあ全躰何用が御座らつしやるだあね？」
「あの何かい、御主人はお何歳だい？」
ルキヤーヌイチは烏散さうに自分の面を視て、
「何歳だと聞かつしやるだあね？　よくは知りましねえが、何でも最う四十越してるだんべえ。」
「四十越してゐる？　お妹子は？」
「妹子さまあ未だ四十にならつしやりましねえ。」
「へえ、然うか！別品か？」
「何方がね？　妹子さまかあね？」
「然うさ、妹子さまさ。」
ルキヤーヌイチは微笑した。
「人にや如何ねえに見えるか知りましねえが、私にや美しかあ見えましねえ。」

「では如何なだ？」
「えら醜悪だ。些とんべえ痩つこけた方で。」
「はてな！　御姉妹の外誰も來なさらんか？」
「何方も。誰が來るもんだ！」
「そんな譯はない！…　余が…」
「やれ〳〵、旦那さま！　お前さまと話べえ爲ちよつたら、終結が有りましねえ」、と老人氣を焦つた。「えら寒い事だ？　もう御免のう蒙りますべえ。」
「ちよいと待つた…そら…」と豫て用意して來たチェトヴェルタークの銀貨を出して與ちうとすると、手は急に閉る耳門の戸に撲たれて、銀貨は地に落ちて、ころ〳〵と轉がつて、自分の足下で伏さつて了つた。
「ちよッ、虚言つき老爺め！　ラマンチャのドン、キホートめ！　饒舌るなと命けられたな…　待て〳〵、その手は喰ふまい…」

で、自分は如何あつても必ず探り出さずには置かぬと我と我心に誓つた。けれども、如何して可いか解らぬので、半時間ばかりと云ふもの其邊を往きつ戻りつしてゐたが、聽てまづ村へ出て此邸へ來たのは誰であるか、また邸は誰の所有であるか、それを聞糺して、それから再び取つて返して、而して事の明白になるまでは、それこそ、一寸も動くまいと決心した。例の女だからとて、全然外出をせずには居られまい、すれば白晝間近で幻影でない正體を見屆けられぬことはあるまい、と思つたのである。村までは十町も有つたらうが、自分は足輕に活潑に歩きながら、直ぐと其處へ往つた。妙に氣が立つて靜止としてはゐられぬやうな心地がする。昨夜熟く睡なかつたので、氣持の好くなるほど新鮮な朝の空氣に觸れると、神經が狂ひ出す。村で仕事に行く二人の百姓を捉へて、此徒から聞出される事だけは聞出したが、自分の立寄つた村は例の邸の在る所をも辺めてミハイロフスコエと稱ふさうで、邸は故の陸軍少佐シル

イコーフの後家でアンナ、フョードロヴナといふ者の所有であるさうだが、此後家にはベラゲーヤ、フョードロヴナ、パダーエヴァといつて、今まで獨身で通して來た妹が一人ある。最う姉妹とも沙汰過ぎた年配で、金滿家で、始終旅行ばかりしてゐて、殆ど邸に居たことが無いから、下女二人と料理番一人の外は召使も無い、は可いが、アンナ、フョードロヴナは此頃莫斯科から妹と二人で歸つて來たのだといふ…　さあ、是がどうも解らない。百姓にまで例の女の事が口留してあらうとは思はれない。と云つて、四十五にもなる後家のアンナ、フョードロヴナ、シルイコーフと昨夜見たあの若い美人とは取つても附かん事だ。ベラゲーヤ、フョードロヴナも、噂で聞けば、餘り美しくないと云ふし、それにソルレントで見かけた女をベラゲーヤは未だしも、パダーエヴァなどゝいふと思つてすら、首が蹙んで冷笑が出る。けれども昨夜その女を彼邸で見た…見たとも、確に此眼で見たのである。齒痒いも齒痒し、業も沸えるし、思ひ立つた事は飽く

まで枉げぬ氣になつて、直樣邸へ引返さうかと思つたが…時計を見れば、まだ六時にもならぬ。最う少し猶豫する事にした。といふものは、恐らく邸では未だ眠てゐるであらうし…それに今頃からその邊を徘徊ては、徒に人の疑を惹くといふものである。その上目の前には灌木が生え擴がつてゐて、其彼方には白楊の森が見える…我ながら感心な事には斯う心に懸る事があつても、獵を爲たいといふ貴とい氣は未だ失せ了つてはゐなかつた。心中で「ひよつとすると、雉鳥に出會るかも知れん――その内には時刻も移らう。」そこで灌木の間へ入つた。けれども、有體を云つて了へば、臆に氣無しに、此道の規則は全然棄てゝ了つて、歩き散らして、始終犬に目を注けてゐるでもなければ、蓊鬱した灌木の傍に來ても、頭の紅いチョールヌイシ鳥名のでもけたゝましい羽音を立てゝ起つかと思つて、探つて見るでもなく、唯時計ばかり眺めてゐた。何の役にも立たぬ事で。さて遂に九時になる。「恰ど好い！」と口へ出して云つて、今

しも邸へ引返さうとすると、つい傍の雜草の中から、不意に大きなチョールヌイシが飛出した。大した獲物と、其奴を狙撃して、翼下に傷を負せると、鳥は殆く墜ちさうにしたが、夫でも押堪へて、急しく羽敲をしながら、潛るやうに森の方へ飛んで行つて、あはや一端の白楊を飛越さうとして、弱つて、獨樂のやうに回轉つて、茂みの中へ落ちた。かうした獲物を棄てゝ了ふは勿體ないから、矢庭に踪を追つて、森の中へ駈込んで、ヂャンカ犬の名を嗾けて、二三分も待つてゐると、軈て勢の無いくうくうといふ喘聲とばたゝくといふ羽の音がしたが、是は敏捷い犬の足に敷かれて、哀れなチョールヌイシが蹠いたのである。さてそのチョールヌイシを拾上げて、囊に納れて、何心なく振返つて見ると其儘――釘付にされたといふ身で、其場に立ずくむで了つた…

自分の駈込んだのは極く樹深い蓊鬱とした森であつたから、鳥の落だ處まで行着くすら容易な事ではなかつたが、其所を少し離れて車路が曲

折つてゐて、その路を今例の美人と昨夜自分を乗越したあの男とが馬で静に連立つて行く。あの男といふのは髭で判つた。二人とも默つて、静に手を取交して、乗つてゐた馬も二頭とも長い頸を美しく伸して、だるさうにぼく〳〵行く。はつと最初は驚いた…さうさ、驚いたのだ。はつと思つた時の心地は驚いたとより外に言様はない…が、ふと我に復つてさて一心に女を目守た。何様美しかつた！　目も覺めるばかりの青葉の間を此方へ來るその姿は嬋娟なものである！　優しい樹影やほんのりした青葉の反映が女の身躰を――丈長な鼠色の衣服や、少し傾けた首筋や、淡紅色の顔や、低い帽子の下から美しく漏れ出た艶やかな黒髪の上を静に這つてゐる。けれども、其面色に顯れた、ほれ〳〵とした、物の言はれぬ程にほれ〳〵とした、染々嬉しさうな所は、何と言つたら言盡れやう！　可嬉と思ふ心に壓されたかのやうに頸垂れて、半分は睫毛で隱れた黒眼勝の眼の中を濡まして金色の光を漏してゐたが、その嬉しさうな

眼は何處を視てゐるでもなく、唯細眉を冠つてゐる。曖昧な他愛もない微笑――深い喜から出た微笑が口元にほのめいてゐる、見た所では、餘りの嬉しさに力が脱けて、少しぐたりとした氣味で、咲いた花の重みに莖の折れた趣か何處かにある。手も力無さうに、片々は並んで行く男の手の中に、片々は馬の領髪の上に落してゐる。女も熟く視て置いたが、立男をも漏さなかつた……これは面相は露西亞人らしくはなかつたが、立派な美男子で。憚る所なく、愉快氣に女を視て樂むでゐたが、見受けた所では、内々自負してゐるらしかつた。畜生、女を眺めて樂むで、大に得々としてゐたが、さのみ感激してゐたとも見えぬ、辱ないと思つてゐたとも見えぬ。はて辱ないと思はねばならぬさ。眞に、自分は何程の者で如何なに美しい心を持つてゐるか知らぬが、これほど人に慕はれて、こんなに人に悅ばれて耻かしくないといふ者は殆どないものである……實の所、此男が羨しかつた！……その内に二人の者が鼻の先へ來ると……

犬奴が不意に車路へ飛出して吠えつく…　女は愕然として、四邊を視廻して、自分の姿を認めるや否や、強く鞭で馬の首筋を擊つたから、馬は鼻嵐を立てゝ後脚で起つて、兩足を一度に伸ばして、逸散に駈出す。男も直ぐに乘つてゐた驪に馬刺輪を加てゝ駈出したが、それから少し經つて自分が其道を林端へ出た時には、二人は既に野を乘切つて、黄ろく霞む遠方で、品よく拍子を取つて鞍の上に躍りながら行くのが見えた——行くのが見えたが、邸の方角へではなかつた…

見てゐると、二人は驪て薄黒い地平線の上で、鮮に日に照らされたが、それが最後で、其儘岡に隱れて了ふ。自分は恍惚として久らく跡を視てゐたが、驪て徐に森の中へ戻つて來て、手で眼を閉いで、路傍に坐つた。氣を注けて見ると、見識らぬ人に逢つた時は、眼を閉さへすれば、直ぐ其面が見える。僞か眞か誰でも市中で試して見れば判ることである。面相を見識つてゐれば居るほど、浮び難くて、其印象が判然しない。憶出

せても目に見えない…自分の顔などは到底も想像せられないもので、細い局部は明亮するが、全體が成立たない。そこで自分は坐つて目を閉つた——すると直と例の女も、同伴の男も、その乘つてゐた馬も、何も彼も全然見えた…取分け男の微笑してゐた面が瞭然と見えたから、それを走け〳〵視入ると…その面はもや〳〵となつて、絳い霧の如うなものゝ中に消失せて了ふ。續いて女の面影もふは〳〵と飛んで行く中に、是も亦消失せて了つて、二度と浮ばうとしなかつた。起上つて心の中で、「好いわ。兎に角面だけは見識つて置いた、二人とも判然見て置いた…是から名を聞糺すばかりだ。」へッ名を聞糺さうとする！　唐突も唐突だが、隨分くだらぬ好事心ではないか！　とはいふものゝ、自分は決して好事心が亢じた譯ではない、唯運命の爲に、かうまで不思議にも强情にも彼人々に突合はされたからは、責めて其身分だけでも、探出さずには置かれぬやうな氣がしたのである、唯それだけの事である。から、最う

以前のやうに方角が附かぬとて焦心がるやうな事はなかつたが、唯何となく心悲しかつた——は些と耻かしい…　羨ましかつたのであるから…

急いで邸へ往つて見やうとも爲なかつた。それといふも、他人の秘事を訐かうとするのが耻かしくなつたからである。それに白晝、面りに情夫情婦を見たので、よし其事は思掛けぬ事奇異な事であつたにもしろ——氣が休まつたでもないが、何となく熱が冷めた。かうなると最う今迄の事に何も興妙の所も不可思議の所も無い、果敢ない夢に似た所は無いやうに思はれる…

今迄になく心を込めて、また獵に從事たが、畢竟眞の興味はなかつた。稚鳥に出逢つて、一時間半も釣られてゐた…　テーテレスの稚鳥は幾ら口笛を鳴らしても相手にならなかつたが、多分鳴らし方も當でなかつたのであらう。最う大分日が長けてから（時計を視れば十二時であつたが）、邸の方角へ向いて、緩々行くと、軀て岡の上に低い家が見える…胸がま

た躍出した。近づいて…ルキヤーヌイチの姿を見た時には、内々嬉しかつた。ルキヤーヌイチは例の如く孫屋の側の腰掛に徒爾と腰を掛けてゐたが、門を見れば閉切つてある…住居の窓も其通りで…

まだ遠方から、

「どうだな、老爺！　日向ぼこりか？」

ルキヤーヌイチは痩れた面を此方へ向けて、帽子を脱つたばかりで、黙つてゐる。

傍へ往つて、

「どうだい、老爺、好い天氣ぢやないか？」と世辭を云つた、些と御機嫌を取つて置かうと思つて。只見ると、昨日の新しい銀貨が未だ落した儘であるから、「如何したんだ、知らなかつたのか？」

と叢の中から半分ばかり面を出してゐる銀貨に指ざしを爲て見せると、

「知りましねえで。」

「ぢや何故拾はなかつたのだ？」

「何故ちふ事もねえだが、私い錢ぢやねえもんだで、拾ひましなんだ。」

「何故そんな事を云ふよ！」と少し狼狽して、銀貨を拾上げて、またルキヤーヌイチの前へ出して、「まあ是で茶でも喫んでくれ。」

老爺は悠然として微笑しながら、

「難有う御座りまするが、要ましねえ。無くても濟むだあ。難有う御座りまする。」

「なんなら、もつと贈ても可いが…」と益々狼狽する。

「何しにね？　かまはつしやりますな——御志は戴きまするけんど、麵包さあ截片ばかしでも多くあるだあ、もし。そればかしでも食切れねえかも知れましねえ——ひよつとすると。」

と起上つて耳門の戸を閉めさうにする。

「一寸待つた、ちよつと」、と一所懸命になつて呼留めて、「今日はえらい話嫌ぢやないか？……賣めて聞かして呉れ、御主人は——何か、最うお起きなすつたか？」

「起きさつしやりました。」

「而して……御宅か？」

「いんね、御座らつしやりましねえ。」

「では何處ぞ客にでもお出でなすつたのか？」

「いんね、然うでも御座りましねえ。莫斯科へ出發つしやりました。」

「如何して莫斯科へ！　今朝まで此處にお出でなすつたぢやないか？」

「御座らつしやりました。」

「昨夜も此處で？」

「泊らつしやりました。」

「それにお出でなすつた計りぢやないか？」

「御座らしつた計りでがんすよ。」

「ぢや如何して？」

「莫斯科へ出發つしやつてから、最う一時も經つだんべえ。」

「莫斯科へ？！」

呆氣に取られてルキヤーヌイチの面を凝視めた。實に思懸けぬ事である……

ルキヤーヌイチも亦自分の面を視て、老人は老人らしく、諦ありさうな微笑を、乾いた唇を歪めた所と愁を待つた眼の中に湛へた。

久らくしてから、

「令妹も、御一所に？」

「妹子さまも御一所に。」

「では令邸には誰もお出でなさらぬのだな？」

「何方も……」

「此奴人を欺くな。それであんな笑方をするのだ」、と思つたから、「おい、

老爺。お前に少し頼みたい事があるが、聽いては呉れまいか？」

「どんねえな事でがんすね？」と氣の無さゝうに云ふ、そろ〳〵五月蠅なつて來たといふ樣子で。

「邸には、今の話では、何方もお出でなさらんと。如何だ、余に見せて呉れんか？　然うして呉れゝば、賊に何だが……」

「矢張り御座敷を觀さつしやるだあね？」

「さうさ、座敷を觀るのさ。」

ルキヤーヌイチは默つて了つた。が、軈て、

「よろしう御座りまする。入らつしやりませ。」

老爺が屈むで耳門の閾を跨いだから、跟に隨いて入つて、餘り廣くも無い玄關先を通つて、ゆらつく階を昇ると、老爺が戸を突開けたが、戸には錠前もなくて、唯細を圈に結んだ奴が鍵の孔から出てゐる……そこで一所に内へ入つた。住居と云つても、天井の低い室が五間か六間ある

ばかりで、窓覆の間隙を貫さうに漏れる薄明で見た所では、飾附の道具も甚だ質素な古い物ばかりである。と或る室に（例の園に向いた室であつたが）小形の古ピヤノが据附けてあつたから、乾反のした蓋を開けて、壓板を突いて見ると、じうッといふ厭な音がして、氣味わるく鳴止んだ。宛で自分が無禮を加へたとて小言でも言つたやうな鹽梅で。何を見ても、今まで人の居た氣色は見えず、何となく陰々として、噎ぼいやうで、人の住居らしくない。唯其邊に轉つてゐる紙屑の純白な所を見れば、未だ棄てゝ程經た物とも見えぬ。その紙屑を一つ拾上げて見ると、何か書簡の斷片と見えて、表には勢の好い女の手で "ne tarre?" 沈默すると書いてあつて、裏には "bonheur" 幸福といふ文字が讀まれた。窓の傍の圓形の小卓の上には、萎れかゝつた花束を水呑に入れたのと、小さな青い紐とが載せてあつたが、紐の方は紀念の爲に取つて置いた。

老爺は紋紙で張つた小さな戸を開けて、

「それ」と指ざしをして、「これがお寢間でがんすよ。此向にまんだ婢室が有るけんど、それぎりで最う他にや一室も御座りましねえ。」

さて連立つて、廊下を戻つて來ると、錠前の附いてゐる、白ペンキ塗の大戸が見えたから、「彼室は何だ？」と指ざしをすると、

「彼かね？」と老爺は口籠つて、「彼はたゝ……」

「たゝとは？」

「たゝ……物置でがんすよ……」と云つて、玄關へ出さうにする……

「物置？　見てはわるいか？……」

「まあ、旦那さま、そんねえな物見て何になさるだあね？」と不興氣に云ふ。「何が見るもんが有んべえ！　鞄や、皿小鉢の古えのや……物置でがんすよ、たんだ其切の事でがんす……」

「それでも可いから見せて呉れ、頼む、老爺」と云つたが、かう品格を墜しても無理に見やうとするのを内々極り悪く思はぬでもないから、「余

は何さ…余もその何ぞやうと思つて…村にこんな家を…」

耻かしくなつて言切れなかつた。

老爺は白頭を垂れて立在むだまゝ、何だか變に顔越に自分の面を視てゐる。

「見せて呉れと云へば」、と逼る。

「そんだら見さつしやりませ」、と漸と納得して、鍵を出して、漸々戸を開けた。

そこで物置を覗いて見たが、成程何も眼に立つ物は無い。壁には古びた肖像がいくつも懸けてあつたが、其人物は皆殆ど眞黑な佛頂面で、意地悪さうな限付をしてゐる。床には道具の破物が轉がつてゐる。

「最う飽足さつしやりましたか？」と無愛想に問く。

「あ、有難う！」と早口に云ふ。

老爺は戸を閉める。自分は玄關へ來て、それから戸外へ出た。

自分を送出しながら、老爺が「靜に往かつしやりませ」、と口の中で云つて、孫屋の方へ往きさうにするから、背後から、

「昨日お出でなすつた女中はあれは如何いふ方だい？　今日森でお見懸け申した…」

から突然に問懸けて、狼狽かせて、つい泥を吐かせやうと思つたのである。けれども、老爺は低く笑つたばかりで、孫屋へ入つて、戸を閉切つて了つた。

自分はグリンノエへ歸つて來たが、辱しめられた小兒といふもので、痛く極がわるい。

獨語に「いかんな！　余には到底も此謎は解けぬものと見える。ちよッ、仕方がない！　最うこれッきり忘れて了はう。」

それから一時間もして、持村へ歸つて來た、不機嫌な面をして憤々しながら。

一週間經つた。例の女の事、その同伴の男の事、また自分が此人々に邂逅つた事を如何に忘れやうとしても――晝食後の蠅といふもので、拂へば又來て、うるさく纏綿つてならなかつた…ルキヤーヌイチも亦例の仔細あり氣な眼付に、控へめな物の言振で、淋しい哀れぱい微笑をして絶えず懷に浮ぶ。家までが、其事を憶出すと、閉めかけた窓覆の隙間から、家内の樣子をほのめかして、宛で「結局何も判るまいがな」、と云つて、人を嘲弄すやうに思はれる。耐へかねて一日、天氣の好い日であつたが、クリンノエへ往つて、其所から徒歩で…何處へ往つたか、いふまでもないこと。

例の由あり氣な邸が近くなつた時には、實の所、隨分烈しく胸が騷いだ。見た所では、家の體相に些とも變はなく、矢張窓は閉切つた儘で、哀れな孤兒みるやうな鹽梅である。唯孫屋の前の腰掛には、ルキヤーヌイチの代りに、赤いシヤツに木綿のカフタン長衫の名を着た、二十歳ばかり

の、若い、僕らしい男が腰を掛けて、蓬々とした頭を手で支へて、坐睡をしてゐたが、をり〳〵頓倒かけては愕然として飛上る。

「お早う！」

と大きな聲で言葉を掛けると、其男は急に跳起きて、眼をきよと〳〵させて自分の面を視た。

「お早う！」とまた云つて。「老爺は如何した？」

「老爺さまちふは？」と徐々いふ。

「ルキヤーヌイチさ。」

「あ、ルキヤーヌイチでがんすか！」と餘所を顧いて、「ルキヤーヌイチに何ぞ用でも御座らつしやるだあね？」

「然うだ、少しルキヤーヌイチに。家か？」

「い…いんね」、と吃つて、「ルキヤーヌイチは…その…何ちふたら可かんべえ…」

「病氣なのか？」

「いんね。」

「ぢや如何したんだ？」

「ルキヤーヌイチは最う居りましねえ。」

「如何して？」

「如何してちふこともねえだが、えら珍事ちふやうの事べえ有りましつけえ。」

「死んだのか？」と愕然とする。

「首い縊つておつ死にましたあ」、と小聲になつて答へる。

「首を縊つて？」と吃驚して大聲を揚げて手を拍つ。

「首い縊つて。」

默つて了つて、唯互に面を視合はしてゐた。

「最う餘程になるか？」と軈て自分が口を開くと、

「今日で五日になるだ。葬禮は昨日出しましたあ。」

「なんで首なんぞ縊つたんだらう？」

「から解りましねえ。一本立でよ耕奴にあらぢ手當のう戴えて、不自由ちふ事あ些とも知んねえで、旦那樣方にや親族の者のやうに愛えがられて居つたし、私らにや旦那が有るでがんすよ——達者で御座らつしやりませす露國の農夫は遠く離れ居る者の噂なども。何ちふ事だか、から解りましねえ。だから大方死神樣のう取付かしつたんだんべえッて、いひますことよ。」

「如何して縊つたらう？」

「如何してちふ事もねえだが、つい縊りましたあだ。」

「以前からそんな樣子でもあつたのか？」

「さあればね…何も是れつちうて…その…有りましなんだよ。不斷からえら陰氣な人で、あちよ云つても眞にしねえだ。はあすう〳〵ばつか云

うて、つまんねえちて。年齢も年齢だあからね。死ぬべえちふ前から始終何だか考へ出した。たまにや私等が所へも遊びに來ましつけえ、村さあ、私い甥に當るもんだあからね。「ワーシャよ。我あ所へ泊りに來ねえか？」ていふから、「何故や、叔父さあ？」「何故ちうて、何だか恐ねえだ、一人ぢや淋しいと思へ。」そいで私い泊りに來よりましつけえ。泊に來て見ると、叔父貴い時々戸外へ出て、母屋あ眺めて、こんねえにして眺めてよ、首い打振つて、溜息のう吐きをる事も有りましつけえ…死ぬべえちふ前の日も、晩氣に私い所へ呼ばりに來たもんだで、私い泊に來ただあ。一所に孫屋さあ來ると、叔父貴い些とんべえ腰掛に腰よ掛けちよつたつけえ、ついと起つて出て行つたあから、私い待ちよつたけんど、えら手間あ取れるもんだで、戸外へ出て呼ばつて見た、「叔父さあよ！叔父さあ？」ちて。返辭いしねえ。はあてな、何處へ行かしつたんべえ、母屋ぢや有んめえか、ちて往きて見ましたあ。最う暗くなつて來たゝあ。

物置の傍あ通ると、戸の彼方で、あんだか知んねえが、がり〳〵ちうたから、戸べえ開けて見ると、叔父貴い、窓の下だつけえ、ぶつ蹲踞ちよる。「叔父さあ、あぢよ爲ちよるだあね？」ちたら、叔父貴い突と此方い向いて、私い叱りつけた。眼玉あきよゝろ〳〵して、貓の眼玉見たやうに打光つちよる。「あんだちて來た？　面あ剃つちよるが我え眼に入らねえか？」ちた。この聲がえら皺嗄れちよつたとこよ。そりよ聞くと、私い身の毛え彌立つた、何故だか知んねえが、恐なくなつて來た…大方そん時から最う死神樣のう取付いて御座らしつたんべえさ。「闇中でや？」ちたが、膝は震へに震へるだ。「あんでも可から、其方い往つちよれ」、ちた。私い此方い來ると、叔父貴も物置のう出て來て、鎖べえ卸した。それから一所に孫屋さあ來て、私い始めて蘇生つたやうな氣持いしました。そいでまた「物置で何よ爲て御座つたゝね？」ちて聞いたら、叔父貴い狼狽して、「默つちよれ。饒舌るな」、ちて臥煖爐へ上くつて臥つ

了つたあから、私い考へたい。「話い爲ねえ方が可かんべえ。叔父さあ今日は何だか常でねえ、大方氣色でも悪いだんべえ。」そこで私も臥燵へ上くつ了ひました。燈火は隅の所に點いちよる。私い横臥つて、うつら〳〵ちよつたと思ひなさろ…　走ると、ふいに戸がすうッ…ちて開いた、些とんべえ。叔父貴い戸を背にして臥ちよつたに、知んなさつてゝあろが、些とんべえ耳が遠いだ。それだのによ、ふつと飛起きて、「誰だあ、我あ呼ばつたなあ、あゝ？　誰だあ？　はあてな、お迎が來たゝあな、お迎が！」ちて、帽子も冠らねえで、出て往つた…「何よ爲ちよるだんべえ？」と思へながら、私はあ濟まねえこんだが、つい其儘眠つ了ひましたあモシ…　翌朝になつて眼べえ覺して見ると…叔父貴い居ねえ。戸外さあ出て呼つて見たが、何處にも居ねえ。門番の所さあ往きて、「叔父さあの出て行ぐを汝え見なんだか？」ちて聞くと、「うんにや、知んねえ」、ちふ。「はあてな、様子可異ぞよ…」「あんだちて？」私等二人とも慄然と

した。「往きて見べえ、フエドセイチの門番、母屋ちや有んめえか、往きて見べえ」、ちたら、「往きて見べえ、ワシーリー、チモフエイチの若者の名」、ちたが、其癖彼え面あ壁土のやうに純白になつちよるだ。二人で母屋さあ往きました…　私い物置の前を通りながら、見ると、鍵い全で外れちよる、戸をこづいて見ると、戸べえ内から締がしちある…　フエドセイチい直ぐ窓のある方へ廻つて覗いて見たつけえ、大え聲で、「ワシーリー、チモフエイチ！足が垂下つちよるよ、足があ…」ちたから、私い窓の方さあ往きて見たら、其足あ叔父貴の足だつたと思ひなさろ。室の中央で縊りましたあだ…それから御檢視のう願つて、繩さあ外して見たら、結目え十二べえ有りましつけえ。」

「それで檢視は如何した？」

「如何しますべえ。唯えら考へたゝ、何故だんべえちて。さあ解んねえそれだもんだで、大方氣べえ違つたんだんべえちふ事になりましたあ。死

ぬべえちふ前ごろにや、頭が痛めてなんねえつて、始終ぐづ〳〵云つちよりましつけえ」

それから尙ほ半時ばかりも談話をして、若者とは遂に分れて了つたが、變な心地がした。實の所、此古家を見ると、妄信ではあらうけれど、內〳〵薄氣味惡く思はぬ譯に行かなかつた。尤も一ケ月經つて持村を去つてからは、此厭な談も、不思議な邂逅も次第々々に記憶を脫出て了つた。

（二）

三年經つた。其間は大抵彼得堡でなければ外國にのみ居たし、それに田舍へ歸つても、永くは居なかつたので、グリンノエへも、ミハイロフスロエへも、一度も往かなかつた。また例の美人も、彼の男も、其限りで何處でも見掛けたことはなかつた。尤も三年目の末の事であつたが、一日莫斯科の去る知己の家で、シルイコーヴァと妹のペラゲーヤ、パダーエヴァ

に——凡夫の悲しさには、其時まで未だ虛構の人物どのみ思つて居た、そのペラゲーヤに出逢つた。姉妹とも最う若くは無かつたが、なか〳〵人好のする風で、談話をさしても、愚な事を云はぬのみか、快活くて、面白い。大分旅行したと見えるが、また爲たいけいものはあつて、人に接する工合が自と快活である。けれども、例の女と此人達とを較べて見れば、何處さら似寄の所はない。紹介をして貰つて、姉のシルイコーヴァと（妹の方は何處からか來た見識らぬ地質學者と談話をして居たので）シルイコーヴァと談話を始めて、某縣では隣同志だと告げると、

「あ、眞に彼所に少しばかり地面が有りましたつけ——グリンノエの傍に。」

「知つてゐます。ミハイロフスコエでせう？　知つてゐますとも。時にはお出になりますか？」

「私？　稀に。」

「三年前にお出なさりはしませんでしたか？」

「待つて頂戴よ。たしか、參りました。さう〳〵、參りましたとも。」

「令妹と御一所でしたか、或は御一人でしたか？」

後家どの玄ろりと吾の面を見て、

「妹と一所に。一週間ばかり居りました。矢張用事が御座いましてね。けれども、何方にも御目には懸りませんでしたよ。」

「さあ…　あの邊にはあまり御交際なさるやうなものも有りませんね。」

「然うですよ、餘り御座いませんよ。それに私は御近所の交際が甚い嫌だもんですから。」

「あの、何でしたつけね、たしか其年に不幸な事が有りましたつけね、ルキヤーヌイチが…」

シルイコーサは忽ち目を濕ませて、

「貴君は彼を御存じでしたか？」と乘地になつて、「誠にひよんな事で。あんなに氣質の善い老人でしたが…それも、貴君、原因も理由もなく…」

「然うださうですね。實にとんだ事でした。」

妹のベラゲーヤが側へやつて來た。先程から地質學者にウォルガの岸の地質の講釋を聞かせられてゐたが、最う可厭なつたものと見える。

と見て姉が、「ちよいと、Pauline。あのMr.は此方ルキヤーヌイチを御存じだとさ。」

「おや、然うですか。慇懃な事をしましたつけ。」

「三年前に貴嬢はミハイロフスコエへお出なさつたでせう、あの時分私は屢次彼邊へ遊獵に往きました。」

「私が？」と少し怪訝な面をする。

「然うさ、當然さ！」と姉が急に横鎗を入れて、「おや、記えてゐないの？」

と凝と妹の眼の邊を瞶視る。

ふいにベラゲーヤが、「あ、さう〳〵…然うでしたつけ！」

自分は心中で、「へん、如何だつたか。」

「ね、ベラゲーヤ、フードロヴナ、何ぞ一つ聞かせて下さらんか？」と突然言出したのは白つぽい光澤のある前髪を鷄冠のやうに立てた、甘たるい曇眼の、脊の高い、若い男である。

「然うですねえ」、と生娘は躊躇する。

「貴嬢は唱歌を爲さるか？」と自分は鋭く云つて、急に起上つて、「どうぞ…是非、何ぞ一つ。」

「何をね、貴君？」

力て平氣な無頓着な風で、「伊太利歌で…Passa que, ovlli といふ文句で始まる歌があるが、御存じでせう？」

「存じてをります」、と誠に邪氣なく云つて、「それが好う御座んすの？唱つて見ませう。」

とピヤノに對つた。自分は、ハムレットの格で、姉のシルイコーヴァに目を注けてゐた。シルイコーヴァは始てピヤノの音がした時には、少し慄然としたやうであつたが、それでも終まで平氣で聽いてゐた。パダーエヴァはなか〳〵巧く唱つたので、歌曲が關むと、例の喝采が響き渡る。最う一つ何かと言出したが、姉妹の者は目を視合せて、間もなく歸つて了つた。二人が座舗を出る時に、impromtum 折がわるいの歳と言つたのが聞えたから、「當然さ！」と自分は思つたが――それぎりで最う姉妹の者には逢はなかつた。

それから一年經つた後の話であるが、自分が彼得堡へ引移つて彼此する內に臘て冬になつて假面舞踏會が始まつた。或晩、十一時ごろに、さる親友の所を出て歸宅らうとしたが、如何にも氣色が悪かつたので、貴族倶樂部の假面舞踏會へ往つて見た。氣を注けて見ると、相應に品格の有る者がとんな所へ來ると、如何いふものだか、温順さうであて海氣味

の悪い顔色をするものであるが、自分も然ういふ顔色をして、久らく圓柱に沿いて、姿見の側を徘徊してゐると、をり〳〵怪し氣なレースを着けて古ぼけた手袋を穿めたドーミノ（假面舞踏會衣裳）連が附隨から、そんな時には申嚴で紛らしてやる、其位だから此方からは滅多に話懸もせずに、久らく耳を吹えるやうな喇叭の響や、唸るやうな胡弓の音に假してゐたが、遂に退屈し盡して、頭痛を儲けて、今しも宿所へ歸らうと……し……て……見合せた。只見れば、黒い衣裳を着けた女が圓柱に靠着てゐる。それを見て、停止て、傍へ往つて……宛で譚のやうだが……直ぐそれと知れた、例の女だと。如何して知れたか。女が假面の細長い孔から氣の無さうに自分を視た、その眼付でか、腕や肩の美しい肉付でか、姿に格別に女らしく氣高い所があつたのでか、それとも又自分の心の底で不圖一種の聲がしたのでか――何とも言ひかねるが、兎に角それと知れた。胸を躍らしながら、幾回か傍を通つて見た。女は身動をも爲なかつたが、その

靠着てゐる所に如何にも落膽したといふ趣が有つたので、それを見ると、ふと

Soy un cuadro de tristeza,
Arrimado a la pared.

（吾は壁に寄せかけたる哀なる畫ぞとなり）

といふ西班牙の奇異譚の二句が胸に浮んだ。

女の靠れてゐる圓柱の後へ廻つて、その耳の所へ口を寄せて、小聲で、

Passa que colli....

といふと、女は急に此方を振向いた。眼と眼とぴつたり出會つたので、女が驚いて眸子を擴げてゐるのまでが分つた。曖昧な手附をして片手を出して、不審さうに自分を視てゐる。

自分は女を凝視たまゝ、落着いた聲で、「何年の五月六日の夜の十時ごろ、ソルレントの della croce 町で。それから露西亞では、何縣のミハイロ

フスコエ村で、何年の七月二十二日に…」

と佛語で云つた。すると女はたち〳〵となつて、吃驚した眼付で、足の爪頭から頭の天邊まで自分を視廻して、"Venez"（こちらへの義）と小聲で云つて、身輕く座敷を出て行くから、自分も跟に隨いて往つた。

雙方とも無言であつたが、此女と比肩で行く時の自分の心地は到底も筆には書盡くされぬ。面白い夢がふと現實となつたと謂はうか…垂死のたピグマリオンの目の前へ、ガラテーヤの像が活きた女と化つて、臺座を下りて來たと謂はうか…宛然夢のやうで、息氣も塞りさうだ。

共に幾間となく通過ぎて、と或る一間へ來ると、女は窓の側の餘り大きくもない長椅子の前で停歩て、腰を掛けたから、自分も其側に腰を掛けると、

女は徐に面を此方へ向けて、しけ〳〵自分を視めて、

「貴君は…貴君は「彼人」に頼まれたのですか？」

と云つたが、勢の無い、おろ〳〵聲であつた。

問はれて、少し狼狽して、吃りながら、

「いや…頼まれたのではないのです。」

「では彼人を御存じなのですか？」

「知つてはゐます」、と理ありさうに答へた、化課せて見たくなつて。「知つてはゐます。」

女は烏散さうに自分を眺めて、何か言ひさうにして、言ひかねてゐる。

「貴女はソルレントで彼男を忍ばせた事が有る。それからミハイロフスコエでは嬶曳を爲つた事も有るし、馬で一所にお出なすつた事もある…」

「如何してそれを…」

といひかける。

「ちやんと知つてゐます…何も彼も知つてゐます…」

「お顔が何だか見覺が有るやうだけれども…いゝえ、然うぢやない…」

「でせう。私はまだ御存じない筈だ。」

「ではかうして如何しやうと仰しやるの？」

「ちやんと知つてゐます。」

旨く端緒が開いたから、此機會を外さず斬込まなくては可かぬ事も、ちやんと知つてゐますの、何も彼も知つてゐますのと、いつまでも一つ事ばかり言つてゐるのは最う可笑しくなつた事も、能く承知してゐたが――何分おそろしく胸が騷ぐに、思ひがけず邂逅つて痛く狼狽して、動顛して了つたので、是より外には何さら言得なかつた。それに實際最う何も知つてゐない。漸々馬鹿じみて來る。初は此女にも萬事見徹の不思議な人物とも思はれたらうが、それが急に何を言つてもにや〳〵笑つてゐる白痴になりだす、とさ自分でも心附いてゐたが……如何も仕樣がない。

「何も彼も知つてゐます」、と最う一遍口の中でぐづ〳〵と言つて見た。

女はじろりと自分の面を視て、急に起上つて行かうとした。

是れは又餘り酷い！　自分は其手を控へて、

「何卒最う少し下に居て下さい、御話し申したい事が有るから。」

女は思案して又腰を掛けた。

自分は熱心になつて、「只今私は何も彼も承知してゐる樣に申しましたが、あれは實は虚言です。なあに、何も知つてはゐません。けれども、不思議なだか、彼方は如何いふ方だか、知つてはゐません。貴女は何人事で、宛で誰かに弄られたやうな氣持がしますが、二度貴女方を御見懸け申した、而も其場合がいつも同じやうな場合で、見る氣もなかつたが、つい貴女方の或は秘して置きたくお思ひなさる所を見たものですから、それで今も圓柱の傍であゝ云つて貴女を驚かしたのです。」

と云つて、それからソルレントで見懸けた事も、露西亞で出逢つた事も、ミハイロフスコエで聞、糾しても本意を遂げなかつた事も、莫斯科でシルイコーヴァ姉妹の者と談話をした事も、少しも包み隱さず、悉皆話し

て了つて、

「是切の事です。貴女の爲めに私がどんなに深い強い感じを起したかは申しますまい。貴女を見て平氣でゐろと云つても、そりや出來ない相談だ。それに、その感じは如何な感じであつたか、それをお話し申す必要もない。貴女をお見懸け申した、其場合の事を考へて見れば、善く判る事です……私だつて永までも愚癡らぬ希望を抱てゐるやうな者でもないが、然し今日といふ今日は實に何とも謂はれん心地になつた、お察し下さい。けれども、假令ひ僅の間でも、貴女の注意を惹かうとして、不都合な事を言つたのは濟まなかつた、お謝罪をします。」

女は首垂れて、文もない辯解を聞いてゐたが、驚て、

「それで貴君は如何しやうと仰しやるんです？」

「私ですか？　如何するも斯うするもない……最う是で十分なのです……他人の秘密は貴重します。」

「然うですか？　それでも今まで貴君は……」と言ひかけたが、氣を改へて、「然し御無理は御座いませんよ。何人でも貴君の位地にお出なすつたら、矢張然う爲さるでせう。それに、不思議な事でかう數次お目に懸つてみれば……まんざら御緣が無いでもなし。聽いて戴きませう。世間には隨分氣の知れない方も有つたもので、御自分が不仕合だからと云つて、始て逢つた方に愚癡を漏したいばかりで、こんな舞踏會なんぞへお出でなさる方も有るさうですが、私はさういふ者では有りません……さういふ方には他人の同感が必要なんでせうが。私は何人にも同感して戴きたくない。私の心は謂はゞ死んで了つたやうなものですから、今夜此所へ參つたのも、その結局を全然付けて了ひたいばかりで。」

とハンケチを口へ加がつて、少し言へないのを無理にといふ氣味で、

「と申したからつて、能く有る假面舞踏會の繰言と思召さないやうに。私は今そんな氣樂ぢや有りません……」